



仙人の飲食

| | |
|-------|---|
| メタデータ | 言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-04-17 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大形, 徹 メールアドレス: 所属: |
| URL | https://doi.org/10.24729/00004277 |

仙人の飲食^{*1}

大形 徹

はじめに

仙人の飲食や薬に関して時系列に並べて考察した。『周禮』天官冢宰、食医には、「掌王の六食、六飲、六膳、百羞、百醬、八珍の齊を和するを掌る^{*2}」とみえる。食べ物と医が関連するという考え方であろう。この場合、飲食が体に悪いという考え方ではない。一方、同じ天官冢宰、医師に「毒藥を聚めて以て醫事に共す^{*3}」とみえる。ここは毒薬ではなく「毒」と「薬」で、それらが医事に役立つということであろう。天官冢宰には「疾医」もあるが、そこには「毒」のことはみえない。「毒」は天官冢宰の瘡医に「凡そ瘡を療するに、五毒を以て之れを攻め、五氣を以て之れを養い、五藥を以て之れを療し、五味を以て之れを節す^{*4}」とみえる。ここでは毒と薬がはつきりと区別されている。「五毒を以て之れを攻め」は、病毒に対して毒で攻めるということであろう。一方、「五藥を以て之れを療し」と薬は療すとされている。これはそのあと「凡そ藥は、酸を以て骨を養い、辛を以て筋を養い、咸を以て脈を養い、苦を以て氣を養い、甘を以て肉を養い、滑を以て竅を養う。凡そ瘡有る者は、其の藥を受く^{*5}」と展開される。薬は酸・辛・咸・苦・甘・滑の六つに分けられる、それらが骨・筋・脈・氣・肉・竅をそれぞれ養うという。「五」ではなく「六」というのが興味ぶかい。

中国医学は五行思想と緊密に結びつくように思われている。しかし、「六」と結びつくものもある。馬王堆出土の『胎産書^{*6}』では、胎児の四ヶ月目は水を受けて血ができ、五ヶ月目は火を受けて氣、六ヶ月目は金を受けて筋、七ヶ月目は木を受けて骨、八ヶ月目は土を受けて膚革、九ヶ月目は石を受けて豪毛となるという。これも「五」ではなく、「六」である。

さきの「養」は、のちの『神農本草經』の「養命」の上薬、「養性」の中薬に対応するようにみえる。そうだとすれば「毒」は「治病」の下薬と対応することになる。

いまどりあげたような医薬に関する初期の考え方と、仙人、仙薬、仙人の飲食は、どのようにつながっているのであろう。

*1拙稿は2013年3月23日に国際基督教大学で行われた「飲食文化研究会」における講演「仙人になるための飲食」をもとに、2017年の12月にあきらかになった里耶秦漢の記述を加え、大幅に加筆修正したものである。題目は「仙人の飲食」に改題し、飲食と重なりあう薬や仙薬についてもあわせて考察している。これは古藤友子国際基督教大学教授の科研費基盤研究（C）「中国飲食文化と陰陽五行説」24520043の研究成果の一部である。

*2掌和王之六食、六飲、六膳、百羞、百醬、八珍之齊。

*3聚毒藥以共醫事。

*4凡療瘍、以五毒攻之、以五氣養之、以五藥療之、以五味節之。

*5凡藥、以酸養骨、以辛養筋、以咸養脈、以苦養氣、以甘養肉、以滑養竅。凡有瘡者、受其藥焉。

*6拙著『胎産書・雜禁方・天下至道談・合陰陽方・十問』東方書店、2015年を参照。

ここでは、一、里耶秦簡の良薬芳草と昆侖五杏葉 二、『史記』の芝・奇薬・不死薬 三、『論衡』の霞を食べる仙人 四、『列仙伝』などの丹（水銀）の服用 五、『列仙伝』と『神農本草經』 六、『後漢書』方術伝の仙人の飲食の六つの角度から考察した。

一、里耶秦簡の良薬芳草と昆侖五杏葉

始皇帝の時代に作られた里耶秦簡という簡牘に始皇の仙薬探索と関わる記事があるという報道が 2017 年 12 月 22 日にあった^{*7}。里耶秦簡は 2002 年に湖南省の里耶の井戸より出土した秦簡の名である。湖南省里耶博物館の公式ブログに簡牘を拡大鏡で観察する写真が掲載され、「都郷黔首母良薬芳草(都郷の黔首、良薬芳草母(な)し)」「瑯邪獻昆崙五杏葉(琅邪は昆崙五杏葉を献ず)」の内容が紹介されている。ただし観察している簡牘は、この部分ではない。里耶からは 3.6 万枚の簡牘が出土している。現在、『里耶秦簡』と名づけられた書籍^{*8}はいくつもあり、写真版もある。けれども肝心のこの部分は掲載されていない。ここでは報道されたものをもとに簡単な考察を行う^{*9}。

ブログは「千年簡牘が秦始皇の“求仙問藥（仙を求め薬を問う）”の謎を明らかにした^{*10}」とある。

中国の考古学者の最新研究で、秦の始皇帝、嬴政が「仙薬」を求め、その命令は 2000 年以上前にすでに郷鎮に届いていたことがわかった。

湖南省文物考古研究所の研究員、張春龍は、秦代の洞庭郡遷陵県の役所の檔案を研究しているときに、毛筆で書写された細長い簡牘上的一部の文字が、郷の一級の役所の公的文書「都郷黔首母良薬芳草(都郷の黔首、良薬芳草母(な)し)」「瑯邪獻昆崙五杏葉(琅邪は昆崙五杏葉を献ず)」等の内容であると気づいた。

張春龍は、「これらはみな秦始皇が『仙薬』を求めたことと関連している。大意は『都郷』という名の郷鎮には御触れの求めるような芳草良薬がない。おそらく今日の山東省臨沂、青島一帯に位置する瑯琊と呼ばれる地方が、『崑崙山』上で採集した『五杏葉』を献上したということだ」と述べた。…以下略。

省略した部分に、簡牘は「紀元前 222 年から紀元前 208 年ぐらいのもの」という。司馬遷（前 145（または 135）-?）の『史記』には秦始皇本紀や封禪書があり、始皇の記述がみえる。これは始皇の時代よりも 100 年ぐらい後の記述となる。簡牘が始皇帝の仙薬探索記事

*7 <http://hk.crnntt.com/crn-webapp/touch/detail.jsp?coluid=7&kindid=0&docid=104919238>(2017-1-2-22 20:37:07)(2018.2.3 検索)

*8 王煥林著『里耶秦簡校詁』中国文聯出版社、2007 年。張春龍主編『湖南里耶秦簡』1234（中國簡牘書法系列）重慶出版社、2010 年。湖南省文物考古研究所編著『里耶秦簡』文物出版社、2012 年。陳偉主編『里耶秦簡續校釋』第 1 卷、武漢大學出版社、2012 年。里耶秦簡博物館、出土文獻與中國古代文明研究協同創新中心中國人民大學中心編著『里耶秦簡博物館藏秦簡』中西書局、2016 年。

*9 詳しい内容は稿を改めて考察する。ここでは拙稿の構成上、必要なことのみ言及する。

*10 前掲アドレス。

だとすれば同時代の資料として重要である。『史記』には始皇帝の仙薬探索に関して、「芝・奇薬・不死薬・僊者」といった語がみえるが、ここの内容とは一致しない。以下、「都鄉黔首母良藥芳草」「瑯邪獻昆崙五杏薬」の中の「良薬」「芳草」「昆崙」「杏」について考察する。

良薬

「良薬」は、後漢、王逸『楚辭章句^{*11}』天問に、「安んぞ夫（か）の良薬を得て固く臧（よ）ぐする能わざらん^{*12}」とみえる。この部分の注は仙人の崔文子と王子僊の話をもじだして説明する。

臧は善なり。言うこころは崔文子、仙を王子僊に学ぶ、子僊化して白蜺と為りて嬰茀（えいふつ）たり、薬を持って崔文子に与う。崔文子驚懼して戈を引き蜺を撃ち之れに中（あ）て、因りて其の薬を墮（お）とす、俯して之れを視るに、王子僊の尸なり。故に薬を得るも善からずと言うなり^{*13}。

という。

王逸は後漢の人であり、『楚辭』の本文の時代に、そのような話があったとは思えない。しかしながら「良薬」は、後世、「仙」と結びついていくのである。

秦、呂不韋撰『呂氏春秋』蕩兵には、

良薬を得れば則ち人を活かし、悪薬を得れば則ち人を殺す^{*14}。

とみえる。薬の良し悪しによって人を活殺するという。

『韓非子』外儲說左上には、

夫れ良薬は口に苦し^{*15}。

とみえる。

この二つは「薬」そのもので仙薬には結びつかない。

後漢、王充（27-90）の『論衡』道虛になると、

*11漢王逸撰『楚辭章句』。

*12安得夫良薬不能固臧。藤野岩友『漢詩大系3 楚辭』集英社、1967年、134頁は「固く臧（ぞう）する能はざるか」と読み、「大事に蔵（しま）っておけなかつたのだろうか」と訳している。

*13臧善也。言崔文子學仙於王子僊、子僊化爲白蜺而嬰茀持藥與崔文子。崔文子驚懼引戈擊蜺中之、因墮其薬、俯而視之、王子僊之尸也。故言得薬不善也。

*14得良薬則活人、得惡薬則殺人。

*15夫良薬苦於口。

良薬を服食すれば、身氣、故（もと）に復す、…故に夫れ藥物を服食し百病を除かば、身軽く氣長（やしな）われ、其の本性に復さしむるも、安（いざく）んぞ能く年を延ばし世を度（わた）るに至らん^{*16}。

とみえる。

王充は蒙昧な世俗の根拠のない思い込みなどを強烈に批判したことで知られる。藥物を服食して身が軽くなり気が養われるところまでは容認できるが、「延年度世」というのは、不可能だという批判である。この批判により、当時の世俗が藥物(良薬を含む)の服食によって「延年度世」が可能だ、と考えていたことがわかる。

なお「服食」という表現は「仙家の食事法^{*17}」とされており、藥であっても毎日の食事のように服用するイメージがある。一服のように一度だけ飲むというものではない。

ここにみえる「度世」は『楚辭章句』遠遊に「欲度世（世を度（わた）らんと欲す）^{*18}」と見える。その王逸の注は「遂に世を済(わたり)り、先祖を追うなり^{*19}」という、つまり先祖の世界、あの世に行くということだという。朱熹（1130-1200）『楚辭集注』は「世を度（わた）るとは、塵世を度(わたり)り越えて仙去するを謂うなり^{*20}」と述べ、仙人になることだという。

芳草

「芳草」も『楚辭章句』にいくつかみえる。離騷には

何れの所か獨り芳草無からん^{*21}。

何ぞ昔日の芳草、今直ちに此の蕭艾と為れるや^{*22}。

と「芳草」があらわれる。

もっとも、ここ「芳草」は比喩として人に喻えている。そのため必ずしも藥というわけではない。そして服用するともされていない。

『黃帝內經素問』腹中論に、「高粱、芳草、石藥を服す可からず、石藥は癧(てんかん)を發し、芳草は狂を發す^{*23}」とみえる。ここでは芳草と石藥が並列され、いずれも服用してはいけないとされている。

漢許慎撰、宋徐鉉增釋『説文解字』卷五下、鬯部では、「鬯は芳艸なり。…一に曰く鬯

*16服食良藥、身氣復故、…故夫服食藥物除百病、令身輕氣長、復其本性、安能延年至於度世。

*17白川静『字通』平凡社、1990年、服食。

*18欲度世。

*19遂濟于世、追先祖也。

*20度世、謂度越塵世而仙去也。

*21何所獨無芳草兮。

*22何昔日之芳草兮、今直爲此蕭艾也。

*23不可服高粱芳草石藥、石藥發癧、芳草發狂。

鬯、百艸の華、遠方の鬱人貢ぐ所の芳艸、合わせて之れを釀（かも）し以て神を降（おろす^{*24}）とされている。ここでは、芳草は鬱だという。そしてこれによって神降ろしができるという。

以上、「良薬」「芳草」は薬ではあるものの、後世の仙薬の話とも微妙につながっていく。また神を呼び寄せることにも使用できるとされていたことがわかる。ただ、管見のかぎり、「良薬芳草」の四文字がならぶ例は見いだせなかった。

崑崙

つぎに「琅邪は昆崙五杏薬を献ず」について考察する。始皇は蓬萊・方丈・瀛州の三神山に魅せられ、始皇二十七年（前220）以来、何度も琅邪を訪れている。「始皇復た海上に遊び琅邪に至る^{*25}」と琅邪を訪れてから、五年後、「海中の三神山の奇薬に遇うを冀（こいねが）うも得ず、還（かえ）りて沙丘に至りて崩す^{*26}」と奇薬を手に入れることができず、崩御している。三十七年（前210）のことである。

始皇帝に関しては、「韓終、侯公、石生、僊人不死の薬を求む^{*27}」「盧生…不死の薬、殆んど得可きなり^{*28}」「盧生、始皇に説きて曰わく、臣等、芝・奇薬・仙者を求むるも、常に遇わず^{*29}」「三神山…諸僊人及び不死の薬、皆な焉（ここ）に在り^{*30}」と、三神山という名はみえる。これは「蓬萊・方丈・瀛洲」である。また具体的な薬としては「芝」だけである。「奇薬」以外に「不死の薬」という記述も多い。

秦の簡牘にみえる「昆崙」の「崐」は音はロン、玉篇読みは、「ロン、ヲチイル、シヅム、クボム、ヤム」である。『説文解字^{*31}』巻十四下、崐は「山阜陥也（山阜陥（おちいるなり））」であり、山の阜（おか）が陥没することになる。唐、王仁昫『刊謬補欠切韻^{*32}』巻一、十七真韻、崐に「山名」とみえる。ここにはたんに「山名」とあり、「昆崙山」あるいは「崑崙山」という説明はないが、通じる可能性はあるだろう。「崐」が「崐」に通じるとすれば、崑崙には中央が陥没した丘、あるいは山というイメージがあるのかもしれない。

『莊子』内篇、大宗師第六には、「夫れ道は…堪坏之れを得、以て崑崙に襲（い）る^{*33}」と、「崑崙」の語がみえる。ただ、この文脈では崑崙がどこにあるのかはわからない。唐、陸德明撰『經典釈文』巻二十六、莊子音義上、内篇七は、「崐崙、山名」とする。また「堪

*24鬱、芳艸也。…一日鬱鬯、百艸之華、遠方鬱人所貢芳艸、合釀之以降神。

*25始皇復游海上至琅邪（『史記』封禪書）。

*26冀遇海中三神山之奇薬不得、還至沙丘崩（同上）。

*27韓終侯公石生求僊人不死之薬（『史記』始皇本紀）。

*28盧生…不死之薬殆可得也（同上）。

*29盧生說始皇曰、臣等求芝奇藥仙者、常弗遇（同上）。

*30三神山…諸僊人及不死之薬皆在焉（同封禪書）。

*31漢、許慎撰、宋、徐鉉增釋。

*32『統修四庫全書』二五〇 經部・小学、『刊謬補欠切韻』五卷。

*33夫道者…堪坏得之、以襲崑崙。

坏」については、「司馬云う、堪坏は神名、人面獸形、淮南欽負に作る^{*34}」とする。

方士の盧生は始皇帝に真人^{*35}について説き、「真人なる者は、水に入りて濡れず、火に入りて蒸（や）けず、雲氣を陵（しの）ぎ、天地と久しく長し^{*36}」と述べた。この内容はむしろ『莊子』内篇、逍遙遊の「神人」、齊物論の「至人」と同じである。しかし、盧生は同じく『莊子』内篇、大宗師にみえる真人のこととして説いたのである。そしてそのことを前掲の「不死の薬、殆んど得可きなり」と結びつけたのである。始皇は感激し、「是に於て始皇曰く、吾れ真人を慕い、自ら真人と謂いて朕と稱さず^{*37}」と自称を「朕」から「真人」に代えたという。始皇の当時、『莊子』の内容は方士に知られていたことがわかり、「真人」と「崑崙」はともに『莊子』内篇、大宗師篇にみえる語である。このことから仙人説は文献的根拠を『莊子』に求めていたことがわかる。

崑崙は『楚辭』や『呂氏春秋』にもみえる。『楚辭』離騷に、「遭（めぐ）りて吾れ夫（か）の崑崙に道す^{*38}」、『楚辭』九歌、河伯に「崑崙に登り四望す^{*39}」、同天間に「崑崙縣圃、其尻（居）安在^{*40}」とみえる。

九章、涉江^{*41}に「崑崙に登り玉英を食らい、天地と壽を同（ひと）しくし、日月と光を同しくす^{*42}」とみえる。ここには食べものとして「玉英」があらわれる。洪興祖の補注は『孝經援神契』を引用して「玉に英華の色有り^{*43}」という。

『呂氏春秋』孝行覽、本味に「菜の美なる者、崑崙の蘋（うきくさ・かたばみ）、…水の美なる者、三危の露、崑崙の井^{*44}」とある。ここでは、崑崙は山ではなく、むしろ水と関連している。そして美味な菜として「崑崙の蘋」をあげる。

杏

里耶秦簡では、「芝」「玉英」「蘋」ではなく、「杏」である。

『礼記』内則に、「…柿、瓜、桃、李、梅、杏、楂、梨…」とみえる。このあたりは果

*34 司馬云、堪坏神名、人面獸形、淮南作欽負。

*35 拙稿『『莊子』にみえる「化」と「真人」について』、「『莊子』にみえる「化」と「真人」について」、「人文学論集」第12集、pp.45～62、平成6年3月、『不老不死－仙人の誕生と神仙術－』、講談社現代新書、全254頁、1992年、第二章、狂奔する皇帝たち、を参照。盧生は真人のことを説いたが、その内容は神人（逍遙遊）や至人（齊物論）に近い。

*36 真人者、入水不濡、入火不蒸、陵雲氣、與天地久長。（『史記』始皇本紀）

*37 於是始皇曰、吾慕真人、自謂真人不稱朕。

*38 遭吾道夫崑崙兮。

*39 登崑崙兮望安在。

*40 崑崙縣圃其尻安在。注に尻は居とみえる。

*41 屈原の作ではなく、「偽作も加わっているとする説も有力であるが、確実な証拠に基づくものではない（前掲、藤野岩友『漢詩大系3 楚辭』集英社、1967年、）」

*42 登崑崙兮食玉英、與天地兮同壽、與日月兮同光。

*43 玉有英華之色。

*44 菜之美者、崑崙之蘋、…水之美者、三危之露、崑崙之井。

実が羅列されている。

後漢、張仲景（150? - 219）の『傷寒論^{*45}』では杏が 15 みえる。たとえば、麻黃湯方では、「麻黃、桂枝、甘草、杏仁」と、杏仁が使用されている。張仲景述、晋、王叔和編『金匱要略』では 25 みえる^{*46}。ここでも「麻黃、杏仁、薏苡、甘草湯」のようにみえ、やはり、杏仁が使用されている。

杏は『神農本草經』にはみえず、『名医別録』では下品である^{*47}。これは『神農本草經』の治病の下薬に相当し、毒をもって毒を制する薬にあたる。杏仁には、青酸配糖体である「アミグダリン約 3%を含む」^{*48}のである。「杏」については、『神仙伝』^{*49}董奉^{*50}の故事にみえる董仙の「杏林」が有名である。そこでは杏を薬用としたとはされないが、董奉は病を治療しているため、薬用にも用いたのだろう。

『列仙伝』にみえる仙薬は『神農本草經』の上薬と共に通するものが多く、それは久服してもよいものであった。「杏」はむしろ下薬である。『神農本草經』の無毒な上薬を久服するという考えのもとでは仙薬にはならないはずである。しかし、実際には、のちに仙薬とされている。

漢、劉歆撰、晋、葛洪輯『西京雜記』卷一に「杏二、文杏（材に文采有り）。蓬萊杏（東郭都尉于吉の獻する所。一株に花、五色を雜（まじ）え、六たび出（い）づ、云う、是れ仙人の食らう所、と^{*51}」とみえる。ここで「蓬萊杏」という名がみえ、仙人の食べるものとされている。「琅邪は昆崙五杏薬を獻す」と、微妙につながりそうである。

『本草綱目』は、三国時代の有名な方士、左慈の名のついた仙方を紹介する。

古に杏を服する丹法有りと云う、是れ左慈の方、唐慎微収む、久しく服さば寿、千萬に至る、と。其の説、妄誕にして鄙（いや）しむ可ければ、今刪（けず）る。其の紂謬（あやまり）の辭、之れを下に存し、讀者をして信ぜしむる母〔母〕（な）からしむるなり^{*52}

*45後漢、張機述、晋、王叔和編、金、成無巳注『註解傷寒論』（四部叢刊初編）で検索した。

*46後漢、張機述、晋王叔和編、宋、林億等註次『新編金匱要略方論』（四部叢刊初編）で検索した。

*47『本草綱目』杏に「別録下品」とみえる。

*48公益財団法人、日本中毒情報センター、保健師・薬剤師・看護師向け中毒情報、20041001.ver1.00.【青梅】の中の杏部分。

*49『芸文類聚』卷八十七、果部下、杏。

*50董奉の名は『三国志』吳志、卷四、士爌の注にみえる。

*51杏二、文杏（材に文采）。蓬萊杏（東郭都尉于吉所獻。一株花雜五色、六出、云是仙人所食）。（ ）は原注。

*52古有服杏丹法云、是左慈の方、唐慎微收、久服壽至千萬、其說妄誕可鄙、今刪。其紂謬之辭、存之於下、使讀者母〔母〕信其誑也。

ここでは、宋の唐慎微の『証類本草^{*53}』が左慈の方を収録したと述べ、鄙俗の説であるから信じてはいけない、という。ところが、以下、附方として「杏金丹」という薬物名をあげ、そこにその内容を載せている。

左慈秘訣、亦た草金丹と名づく。方（ほう）、渾皇子に出（い）づ、之れを服さば長年不死。夏姫之れを服し、乃ち仙去するなり^{*54}。

「昆陰五杏葉」については、これまでまったく知られておらず、その詳しい内容は不明である。「杏」の仙薬としての系譜のはじめに、この「五杏葉」をもってくことができるかもしれない。

二、『史記』の芝・奇薬・不死薬

すでに考察したように『史記』には、秦の始皇帝が仙人になることを求めた話が数多く書かれている。

『史記』封禪書には、以下のようにみえる。

威・宣・燕昭自り、人をして海に入り、蓬萊・方丈・瀛洲を求めしむ。

齊の威王（在位、前358-320）・宣王（在位、前320-301）・燕の昭王（在位、前311-279）のころより、人をつかわせて海に入らせ、蓬萊・方丈・瀛洲をさがしもとめさせた。

齊の威王・宣王・燕の昭王は戦国末期の諸侯だが、僭称して王と称した。始皇帝の天下統一が前221年である。『史記』の記述によれば、それに先立つこと百年ほど前から、蓬萊山の話は齊や燕といった渤海に面する国々の間でおこなわれていたという。

『史記』では、蓬萊・方丈・瀛洲の三神山だが、『列子』では、方丈が方壠とされ、岱輿・員嶠が付け加えられて五山となる。

封禪書には、

此の三神山は其れ傳（伝）^{*55}うるに勃海中（ほくかいちゆう）に在り。人を去ること遠からざるも、且に至らんとすれば、則ち船、風引きて去るを患う。蓋し嘗て至る者有り。諸僊人及び不死の薬、皆な焉に在り。其の物、禽獸盡く白くして黃金、銀もて宮闕と爲す。未だ至らざるに之れを望むこと雲の如きも、到るに及び三神山反りて水下に居る。之れを臨むに輒ち引きて去り、終に能く至る莫しと云う^{*56}。

*53 『証類本草』卷二十三、杏核仁に左慈秘訣を載せるが、稿を改めて論じる。

*54 左慈秘訣、亦名草金丹。方出渾皇子、服之長年不死。夏姫服之、乃仙去也。

*55 『史記集解』によれば、「服虔曰く、傳、音附。或いは曰く、其の伝書に爾云う。當曰く、世人之れを相い伝う」。ここは「傳」と「傳」を形似の誤りと解し、「伝」として訓読した。

*56 自威宣燕昭使人入海求蓬萊、方丈、瀛州、此三神山者、其傳在勃海中、去人不遠、患且

とみえる。

三神山はすぐ近くにみえるのに、行きつこうとすれば船は風が引きもどし、三神山は去っていってしまう。それでもかつてたどりついたものがいたとされ、それによれば諸僊人たちや不死の薬がみなそこにあった。その物や禽獸はみな真っ白で黄金・白銀で宮殿がつくられていた。行きつかないいうちは、これを望み見ると雲のようにみえるが、近くまでいくと反対に水の下にあるようにみえる。これをみていると風が引きもどし、ついに行きつけない、という。

瀧川亀太郎（1881-1954）は三神山についての不思議な様子を、

蓋し海上の蜃氣を望み、以て神山と為すなり⁵⁷。

と蜃氣樓だとする。

ここでは「不死の薬」であるが、後世の『列子』湯問では三山が五山になり、「不老不死」としてあらわされる。

其の中に五山有り、一に曰く岱輿、二に曰く員嶠、三に曰く方壺、四に曰く瀛洲、五に曰く蓬萊。其の山の高下周旋、三萬里、其の頂平處、九千里。山の中間相い去ること七萬里、以て鄰居と為す。其の上の臺觀、皆な金玉、其の上の禽獸、皆な純縞。珠玕の樹皆な叢生し、華實皆な滋味有り、之れを食らわば皆な不老不死⁵⁸。

「珠玕の樹」という真珠や宝石の樹木と、その花や実などが記され、それを食べると「不老不死」となると記される。もとの話は『史記』にあり、それを膨らませただけのようにみえる。しかし、「不死の薬」と「不老不死となる花や果実」というのは、似ているが異なっている。

「不死の薬」は、死なない薬というだけではなく、むしろ、死んだ者を生き返らせる意味を含んでいるのではないかと思われる。そのことはあとで述べる。

『史記』秦始皇本紀では、

盧生、始皇に説いて曰く、臣等、芝、奇藥、僊者を求むるも常（かつ）て遇わず⁵⁹、と。

至則船風引而去。蓋嘗有至者、諸僊人及不死之藥皆在焉。其物禽獸盡白、而黃金銀爲宮闕。未至望之如雲、及到三神山反居水下。臨之風輒引去、終莫能至云。

*57蓋望海上之蜃氣、以爲神山也。『史記会注考証』

*58其中有五山焉、一曰岱輿、二曰員嶠、三曰方壺、四曰瀛洲、五曰蓬萊。其山高下周旋三萬里、其頂平處九千里。山之中間相去七萬里、以爲鄰居焉。其上臺觀皆金玉、其上禽獸皆純縞。珠玕之樹皆叢生、華實皆有滋味、食之皆不老不死。

*59盧生說始皇曰、臣等求芝奇藥僊者常弗遇。

とみえた。「芝、奇藁」と「僊者（仙者・仙人）」が記される。「芝」は一般には靈芝、すなわち、キノコのマンネンダケだと考えられている^{*60}。

けれども、『史記』司馬相如伝には、

芝英を咀喰（そしゃく＝咀嚼）し、瓊華（けいか）を噉（くら）う^{*61}。

とあつた。ここにはいくつか注釈がある。

張揖曰く、芝草は蒻（にやく）なり。榮にして実（みの）らず、之れを英と謂う。嘵、は食らうなり。瓊樹、崑崙の西、流沙の濱に生じ、大なること三百圍、高さ萬仞。華は藁（はな・しべ）なり。之れを食らわば長生す。師古曰く、芝英は、芝菌の英なり^{*62}」。

瓊は赤玉で「瓊華」は、その花ということになる。同様に「芝英^{*63}」の「英」も（実のならない）花の意味である。

『爾雅』卷八、釈草の本文は「茵（しゅう）は芝なり（茵、芝）」。その郭璞の注に「芝は一歲三華瑞草^{*64}」とみえる。一年に三度、花が開く草だとされる。

*60近畿大学薬学部久保道徳研究室編『靈芝』、三一書房、2007年は、靈芝をキノコとする立場からの書籍である。

*61咀喰芝英兮噉瓊華。『漢書』司馬相如列伝。

*62張揖曰、芝草蒻也、榮而不實、謂之英。嘵、食也。瓊樹生崑崙西、流沙濱、大三百圍、高萬仞。華藁也。食之長生。師古曰、芝英、芝菌之英也。

*63司馬相如「大人賦」や『宋書』符瑞志等にもみえる。

*64芝一歲三華瑞草。『爾雅』釈草、「芝」の注。『爾雅』卷八、釈草の本文は「茵^{しゅう}」は芝なり（茵、芝）。その郭璞の注に「芝一歲三華瑞草」とみえる。なお『爾雅疏』には、「釈して曰く、瑞草の名なり。一歲三華、一名茵、一名芝（釈曰、瑞草名也。一歲三華、一名磨、一名芝）」とみえる。「磨」については、宋の丁度等撰、『集韻』に「瑞草」とみえるものの、「茵」が文献の中で使用された用例がない。『本草綱目』菜部、卷二八、「芝」にも、「釈名、茵」とされる。しかし、清の郝懿行『爾雅義疏』釈草は「茵の字は他書に見えず、『（芸文）類聚』卷九十八に『爾雅』を引きて菌芝に作る。蓋し菌の字、破壊して茵と作すのみ」と述べる。要するに「茵」とするのは誤りで「菌」が正しいという説である。

ところが「菌」は、同じく『爾雅』に「中馗は菌なり、小なる者は菌なり。（中馗、菌。小者、菌）」とみえる。「中馗」を説明するのに「菌」という文字をつかっているのであるから、この言い方はすでに「菌」が自明のものであることをあらわしている。ここに郭璞は注して「地蕈なり。蓋の似し。今之江東、名づけて土菌と爲す。亦た馗蔚と曰う。之れを食らう可し」とみえる。「蕈」は「きのこ・くわたけ」のことである。ここでも「菌」が「きのこ」の類だとわかる。

『史記』封禪書には、

是に於て甘泉に更に前殿を置き、始めて諸宮室を廣くす。夏、芝、殿の房内中に生ずる有り^{*65}。（『史記』封禪書）

とみえ、「芝」が、宮殿の中に生えたという。

後漢の班固は「靈芝歌」をつくっている。これは漢の武帝の時に出現した芝について歌う。しかし、この時の芝は「齊房に草を産み、九莖連葉（『漢書』礼樂志）」とされる。

『漢書』武帝紀の詔にも「甘泉宮の内中に芝を産み、九莖、葉を連らぬ^{*66}」とみえる。いずれも九つの茎があり、葉がつながっている。木の枝などがつながる連理^{*67}とよく似ております、瑞祥であろう。花が咲いて葉があるなら、キノコではない。

『漢書』宣帝紀には、元号を神爵と改元した際の詔に「芝」がみえる。

元康四年、嘉穀玄稷、郡國に降り、神爵（=雀、朱雀の類か？）仍りに集まる。金芝九莖、函德殿の銅池中に産し、九真、奇獸を獻じ、南郡、白虎・威鳳を獲て寶と爲す^{*68}。

こここの話は宣帝のときにあらわれた瑞祥の文脈で語られているが、銅の池の中に産したというのが興味深い。というのは、「芝」のもとになったパルメットはエジプトでは睡蓮

郝懿行の説は、「中馗、菌。小者、菌」と、すでに説かれているにも関わらず、わざわざ、「菌は芝なり」を「菌は芝なり」にかえるというものである。さきにみたように「菌」については自明のものとされているため、郝懿行の説には、にわかに賛成しがたい。そうだとすれば、「菌」が文献の中で使用された用例がないことは、どう解釈すればよいだろう。これは、あるいは「菌」かもしれない。この文字は郝懿行があげた「菌」よりも「菌」

の文字に似ている。「菌」は、ふつう「しとね」と解釈されているが、「菌」^{ひやましきみ}・「芋」^{かわらよもぎ}

などとともに「菌芝」とよばれる草の名がみえる。これは、「鬼臼」の異名として『事物異名録』百草、鬼臼に「本草に、鬼臼は日に隨いて出没す。一莖を一臼と爲す。瘧疫を辟くるを治むるを主る。一名、菌芝」とみえる。あるいは「菌、芝（菌は芝なり）」であったのかもしれない。

*65於是甘泉更置前殿、始廣諸宮室。夏有芝生殿房内中。（『史記』封禪書）

*66甘泉宮内中產芝、九莖連葉。

*67後漢 班固『白虎通』封禪に「德至草木、朱草生、木連理」とみえる。

*68元康四年嘉穀玄稷降于郡國、神爵仍集、金芝九莖產于函德殿銅池中、九真獻奇獸、南郡獲白虎威鳳爲寶。（『漢書』宣帝紀）

で水の中に咲く花だからである^{*69}。

『神農本草經』にみえる芝

『神農本草經^{*70}』は薬物 365 種を上葉（養命＝仙葉）120 種・中葉（養性＝養生）120 種・下葉（治病）125 種に分類した書物である。本来、薬物名を羅列した書物があったのだろう。それをふつうの葉から仙葉を作りだすために、わざわざそのように分けたのだろう。上葉には「久服（長く服用すれば）」という魔法のような語がつけられ、その後に仙葉的葉効が記されている。その結果、仙葉は「芝」だけであったものが、100 種をこえるようになった。

「本草」という言葉は（神仙の）本となる芝草（靈芝）ではないかと思われる^{*71}。つまり本草という言葉は仙人になるための葉の意味だということである。

後の『本草綱目』は、鉱物、植物、動物などによって分類するもので、金部、玉部、石部、齒部、草部、穀部、菜部、果部、木部、虫部、鱗部、介部、禽部、獸部、人部に分けられている。本草という名を冠しながら、これはすでに仙人になるための書物ではなくなっている。分類によって書物の意味が全く変わってしまうという例である。

さて『神農本草經』では「芝」は仙葉の上葉に分類され、赤芝・黒芝・青芝・白芝・黃芝・紫芝の六種にわけられる。これらの芝にはいずれも形狀が記されず色で分けられている。そのため、さきにみた始皇帝や武帝の時の芝と同様のものをさすのかどうかは不明である。また画像石や鏡背などにみえる図像資料との関連も不明である。赤・黒・青・白・黃の五種は五行にもとづく分類であろう。

紫芝は『淮南子』説山訓に「紫芝は山に生じて盤石の上に生ずる能わず^{*72}」とみえる。また『続漢書』には、「建初五年、零陵の女子、傅寧の宅内に紫芝五株を生ず。長き者、尺四寸、短き者七八寸^{*73}」と、その紫芝が室内に生えたという記述がみえる。

森立之はそれらを「今の靈芝なり^{*74}」と述べている。キノコとしての靈芝には紫^{*75}のものが多く、文献の紫芝はすでにマンネンタケとしての靈芝^{*76}をさしているように思われる

*69拙稿、中国の死生觀に外國の図像が影響を与えた可能性について一馬王堆帛画を例として、東方宗教 110 号、日本道教学会、1-36 頁、2007 を参照。

*70現今のものは輯本。森立之のものと、孫星衍のものがあり、薬物の分類は微妙に異なる。魏子孝・聶莉芳『中医中葉史』（文津出版社、1994 年）97 頁によれば、前漢の末年にはできていたという説がある。ただし書中には後漢の地名が紛れ込んでおり、それは伝写の際に補入されたものだろうという。

*71拙稿「本草と方士の関係」人文学論集 8、1990 年。

*72紫芝生於山、而不能生於盤石之上。

*73建初五年、零陵女子傅寧宅内生紫芝五株、長者尺四寸、短者七八寸。

*74森立之『本草經攷注』、オリエント出版社、1986 年、巻上之二、紫芝。

*75前掲、日野巖「芝草」49 頁に「紫脱、紫達、紫靈芝の紫という色は赤と黒の間色」とみえる。

*76漢代にすでに『黃帝雜子芝菌』という書があり、「芝菌」とされる。この表現は「芝」をキノコと見ているように思われる。

る。

また「紫」ということに着目すれば、『淮南子』天文訓に「紫宮者、太一居也」と太一の宮殿の色とされている。太一は天帝^{*77}、天神^{*78}ともされ、北極星をさすとされる^{*79}。「紫」は天帝の宮殿の色ということから、のち道教で重要視される色となる。

以下、『神農本草經』の記述をあげる^{*80}。

赤芝、一に丹芝と名づく。味苦、平、毒無し。胸中の結を治し、心氣を益し、中を補し、智慧を増し、忘れず。久しく食らわば、身を軽くし、老いず。年を延ばし、神仙、山谷に生ず^{*81}。

黒芝、一に玄芝と名づく。味鹹、平、毒無し。癰を治し、水道を利す。腎氣を益し、九竅を通じ、聰察。久しく食らわば、身を軽くし、老いず、年を延ばし、神仙。山谷に生ず。^{*82}

青芝、一に龍芝と名づく。味酸、平、毒無し。目を明らかにするを主り、肝氣を補し、精魂を安んじ、仁恕。久しく食らわば、身を軽くし、老いず、年を延ばし、神仙、山谷に生ず^{*83}。

白芝、一に玉芝と名づく。味辛、平、毒無し。欬逆・上氣を主る。肺氣を益し、口鼻を通利す。志意を強くし、勇悍、魄を安んず。久しく食らわば、身を軽くし、老いず。年を延ばし、神仙。山谷に生ず^{*84}。

黃芝、一に金芝と名づく。味甘、平、毒無し。心腹五邪を治し、脾氣を益し、神を安んじ、忠信和樂、久しく食らわば、身を軽くし、老いず。年を延ばし、神仙。山谷に生ず^{*85}。

*77『史記』天官書の正義に「泰一、天帝之別名也」。

*78『史記』封禪書に「天神貴者太一」。

*79『史記』武帝本紀の「天神貴者泰一」につけられた『史記索隱』に引く宋均は「以爲天一、太一、北極之別名」とする。ただし、『呂氏春秋』大樂に「萬物所出、造於太一、化於陰陽」とみえ、注に「太一、道也」とあるので、本来、「道」をさしたのかも知れない。「大いなる一」といった意味で「道」となるのだろう。「泰乙」、「泰一」とも書される。

*80輯本には数種あり微妙に異なる。ここでは馬繼興『神農本草經輯注』（人民衛生出版社、一九九五年）を用いた。

*81赤芝、一名丹芝。味苦、平、無毒。治胸中結。益心氣、補中、增慧智、不忘。久食輕身不老、延年神仙。。

*82黒芝、味鹹、平、無毒。治癰。利水道。益腎氣、通九竅、聰察。久食輕身不老、延年神仙。一名玄芝。

*83青芝、味酸、平、無毒。主明目。利水道。補肝氣、安精魂、仁恕。久食輕身不老、延年神仙。一名龍芝。

*84白芝、味辛、平、無毒。治欬逆・上氣。益肺氣、通利口鼻。強志意、勇悍、安魄。久食輕身不老、延年神仙。一名玉芝。

*85黃芝、味甘、平、無毒。治心腹五邪。益脾氣、安神、忠信和樂、久食輕身不老、延年神仙。一名金芝。

紫芝、一に木芝と名づく。味甘、温、毒無し。耳聾を治し、關節を利し、神を保ち、精氣を益し、筋骨を堅くし、顏色を好くす。久しく服さば、身を輕くし、老いず、年を延ばす。山谷に生ず^{*86}。

「紫芝」をのぞく「五芝」に関して「神仙」と記されている。効能として神仙とみえるのは『神農本草經』365種の薬の中では、ほかに「水銀」と「朴消^{*87}」のみである。仙薬を多く記す『神農本草經』のなかでも、仙人になるための特別視されていたことがわかる。ただ、こここの「五芝」は、あきらかに五行思想にのつっている。五行にもとづいて觀念的に赤・黒・青・白・黄の五色をあげているようにみえる。『神農本草經』の他の箇所では、このように五行による色分けがなされるものは皆無である。これは「芝」だけの特徴である。

子細に検討すると、この「五芝」は〔赤・黒〕と〔青・白・黄〕に二分できるのではないかとおもわれる。「その他」の効能において〔赤・黒〕は「不忘・聰察」である。それに対し〔青・白・黄〕は「仁恕・勇悍・忠信和樂」と儒教的な徳目を強調している。また「安んず」の項目に対して〔赤・黒〕には該当するものがない。しかし〔青・白・黄〕には「精魂・魄・神」と精神に関するものがあげられている。

興味深いのは、「青芝」の一名の「龍芝」である。森立之は東方の青龍^{*88}との関係をいうが、画像石などで青龍に芝草を与えていたことが想起される。形状は必ずしもキノコの形ではないが関連しているかもしれない。

先に見たように紫芝は『淮南子』に登場する。その後、赤・黒、そしてそれに増附する形で青・白・黄にかんする記述が作られたのかもしれない。いずれにしても五種そろった段階で、五行思想の理論のもとで整理されたと思われる。

臓器の配置に関しては、『礼記』月令^{*89}のものと『黄帝内經』のものとは異なっているが、ここでは『黄帝内經』の五行説に従っている。また魂魄や精神に関する表現がみえる。仁恕、忠信等、儒教的な徳目にかかる表現は他の薬物にはみえない特徴である。

「五芝」の場合、「久食」以下の表現が全く同じである。きわめて機械的であり不自然な印象をうける。また「久食」という表現 자체、「食べる」ということで、「服用」ではない。『神農本草經』では異例で、その他の箇所にはすべて「久服」としてあらわされている。

「紫芝^{*90}」に関する表現は「五芝」とは少し異なっている。これは『淮南子』に記述がみえるため、実際に山中にある芝であり、その色も芝の中ではもっとも一般的なものである。

*86紫芝、味甘、温、無毒。治耳聾、利關節、保神、益精氣。堅筋骨、好顏色。久服輕身不老、延年神仙。一名芝。

*87朴消（一名、朴硝石、消石朴）玉石上品／〔鍊餌〕〈服〉之、輕身神仙。朴消は含水硫酸マグネシウム。

*88森立之『本草經攷注』、オリエント出版社、1986年、巻上之二、青芝。

*89『礼記』月令は木が青で脾、火が赤で肺、土が黄で心、金が白で肝、水が黒で腎。

*90「紫芝」に関しては疑問が多い。「抱朴子にみえる芝」を参照

ったように思われる。前掲、日野巖「芝草^{*91}」にはマンネンタケのこととして、「紫脱・紫達・紫靈芝」などとみえる。また紫は五行思想にもとづく五色ではない。紫には儒教的徳目にかかる効能はしるされていない。これは孔子が「紫の朱を奪うを悪む^{*92}」と紫を好まなかつたこと、あるいは先にみたように紫が天帝や道教の関連に使用された色であることが関与しているかもしれない。ここでは「紫芝」のみ、「久食」ではなく「久服」となつてゐる。

本草関係の書物は、『神農本草經』が基本となり、後世、それに附加増益する形で記述がふえていく。上記の五芝に関しては「山谷に生ず」とされている。けれども、それが赤芝が「霍山に生ず^{*93}」、以下、黒芝が常山、青芝が泰山、白芝が華山と五行思想にもとづいて産地の山が規定されてくる。紫芝については「高夏山谷に生ず」とされている。機械的な表現ではあるが、実際に手に入れられるものという本草書の基本はくずれていない。

これらの記述を『中国薬用真菌図鑑^{*94}』と対照させてみると。「靈芝^{*95}*Ganoderma lucidum*f」は、紅芝、靈芝草、丹芝とされており、『神農本草經』の「赤芝」に該当するだろう。色は黄色からだいだいに紅褐色に変ずるとされている。写真や図版をみても赤褐色である。「紫芝^{*96}*Ganoderma sinense*」は、紫黒色から黒色に近くなる、または紫褐色とされている。これは『神農本草經』の「紫芝」に相当するのだろう。他に「芝」のつくキノコは密紋薄芝^{*97}*Ganoderma tenue*、熱帶靈芝^{*98} *Ganoderma tropicum*、松杉靈芝^{*99}*Ganoderma tsugae*等があるが、『神農本草經』との関連は不明である。いずれにしても「芝」はキノコの類とされてしまつて、そのことに対する疑いは全くない。『本草綱目』は「芝」を菜部^{レシ}芝柄類に入れている。「柄」はキクラゲである。このことから、すでにキノコとみなされていることがわかる。『本草綱目』の附図は何とも形容のしがたい形をしているが、『古今図書集成』の図の芝図^{*100}はキノコの靈芝である。

以上、考察したように『神農本草經』では「芝」の形状は不明でキノコとは断定できないものの、後世の本草經の流れのなかでは、芝は明らかにキノコとして扱われている。龍芝という名称に図像資料との接点がうかがわれるものの、図像資料にみえたような芝草の形状をうかがわせるものはない。そして本草書という性格上、「芝」は実際に採集し、服用できるものとみなされていたといえる。

*9149 頁。

*92 「惡紫之奪朱也（『論語』陽貨篇）」。

*93 『名医別録』。以下同じ。

*94 応建浙他編、科学出版社、1987 年。

*95 同、145 頁。

*96 同、147 頁。

*97 同、149 頁。

*98 同、151 頁。

*99 同、153 頁。

*100 『古今図書集成』博物彙編草木典、第四十八卷、芝図。

芝の服用

『列仙伝』は前漢の劉向撰とされる。しかし、そのなかに後漢の地名がみえることなどから、後漢あたりに作られた書物ではないかと推定されている^{*101}。

この『列仙伝』卷上、彭祖に「芝」の服用の例がみえる。

彭祖なる者は、殷の大夫なり。姓は籛、名は鏗。帝顓頊の孫、陸終氏の中子なり。夏を歴て殷の末に至るまで、八百餘歳。常に桂・芝を食らい、導引・行氣を善くす…^{*102}。

ここでは「芝」は「桂」とともに服用されている。

「桂」は肉桂（ニッケイ・シナモン）のこと、『列仙伝』卷上では桂父という仙人が「常に桂及び葵を服す」と桂を服用したことをしるす。桂父は「桂丸」という丸薬をつくったとされるが、「千丸に十斤（2,23Kg）の桂」と多量の桂が使用されていた。

彭祖はその「桂」とあわせて「芝」を服用したようである。ここでは「常に桂・芝を食らう」とみえる。「常食（常に～を食らう）」という表現は、『神農本草經』の「久食（久しく食らわば）」・「久服（久しく服さば）」と同様の表現である。『列仙伝』と『神農本草經』本草經は薬物服用の理論が非常によく似ている^{*103}といえる。この場合、「桂」は実際にある薬である。その「桂」とあわせて食らうとされた「芝」も実在のものとみなされている。

彭祖が行ったとされる導引や行氣も実践的健康法である。かつては奇薬とされていた「芝」だが、『列仙伝』では実際に服用する薬物とされているようにみえる。

『列仙伝』では卷上、江妃二女の話の中で「其の芝を採りて之れを茹らわん^{*104}」とみえる。また卷下、鹿皮公の話にもみえる。鹿皮公は淄川（山東省）の人とされ、高い山の上に神泉があると聞き、山上に建物をつくり、自ら梯道を断ち切って、そこに留まった。「芝草を食らい、神泉を飲み、且（まさ）に七十年にならんとす^{*105}」とみえ、七十年間も芝草と神泉だけで生きていたとする。

この表現は鏡銘の「神山を徘徊し、之（芝）草を采り、渴しては玉（泉）に飲み、飢えては棗を食らう^{*106}」や「玉英を食らい澧泉（れいせん）に飲む^{*107}」などと似ている。鹿

*101澤田瑞穂『列仙伝』（平凡社ライブラリー、1993年）429頁。平木康平・大形徹『列仙伝』（角川書店、1988年）151頁を参照。

*102彭祖者、殷大夫。姓籛、名鏗。帝顓頊の孫、陸終氏の中子。歴夏至殷末、八百餘歳。常食桂・芝、善導引・行氣…。

*103拙稿「『列仙伝』の仙薬について」（「人文学論集」第6集、1988年）を参照。

*104採其芝茹之。

*105食芝草、飲神泉。

*106泰山作・方格規矩四神神獸文鏡。『和泉市久保惣記念美術館蔵鏡図録』1985年、20・『和泉市久保惣記念美術館蔵鏡拓影』1984年、20。

*107福熹四神博局鏡。同上 23

皮公の場合は山頂に留まってじっと動かなかつたようにいわれており、そこに自然に生じる芝草を食べていたようにみえる。

この話では芝草の形状は不明だが、山で実際に採れるものというイメージがある。『神農本草經』で、赤芝が霍山に生じ、黒芝が常山、青芝が泰山、白芝が華山と各地の名山とむすびつけられ、また紫芝が高下の山谷に生ずと、やはり山でとれるものとされていたことと関連しているように思われる。『神農本草經』や『列仙伝』の中では、芝草は天界のものというよりも、むしろ山に入って採集できる薬物として考えられていたように思われる。

抱朴子の芝

晋・葛洪『抱朴子』は神仙になるための方法を説く書物である。その「仙藥篇」に「芝」のことがみえる。

仙藥の上なる者は丹砂、次は則ち黃金、次は則ち白銀、次は則ち諸芝、次は則ち五玉、次は則ち雲母...^{*108}。

以下、あわせて十数種が列挙されている。「芝」は仙藥の中では最上のものではないが、四番目あたりにランクされている。

「芝」は五つに分けられ、「五芝」とよばれている。仙藥篇は最初に『神農四經^{*109}』を引用し、「五芝」について言及する^{*110}。そのため五芝の記述も『神農本草經』を襲ったものと考えたくなるが、以下、に引用するように、その内容はかなり異なっている。

五芝なる者は、石芝有り、木芝有り、草芝有り、肉芝有り、菌芝有り。各おの百許りの種有り^{*111}。

ここは石・木・草・肉・菌に分類されている。石は飴物、木は木本、草は草本、肉は動物、菌はキノコであろう。『神農本草經』の五芝は五行思想の色にもとづく觀念的な分類であったが、ここでは実際的な分類となっている。

石芝なる者は、石象芝なり。海隅の名山及び島嶼の涯に生ず。石を積むがごとき者有り。其の状、肉の如し。頭尾四足有る者に象る。良に生物に似るなり。大石に附し、喜みて高岫険峻の地に在り。或いは却き著き仰ぎ綴らなるなり。赤き者は珊瑚^{*112}の如

*108仙藥之上者丹砂、次則黃金、次則白銀、次則諸芝、次則五玉、次則雲母....。

*109拙稿「『神農本草經』の神仙觀」、日本道教学会、『東方宗教』77号、1991年を参照。

*110現在の『神農本草經』は輯本であるが、紫芝をふくめて「六芝」ある。『抱朴子』では「五芝」である。当時、『神農本草經』には「紫芝」がなかったのかかもしれない。

*111五芝者、有石芝、有木芝、有草芝、有肉芝、有菌芝。各有百許種。

*112石芝は後世、サンゴ類をさすとされることもあった。西村三郎「東アジア本草学における<植虫類>」（山田慶児編『東アジアの本草と博物学の世界』上、思文閣出版、一九

く、白き者は截肪の如く、黒き者は沢漆の如く、青き者は翠羽の如く、黃なる者は紫金の如し。而して皆な光明洞徹、堅冰の如きなり。晦夜、之れを去ること三百歩なるも、便ち其の光りを望見す。大なる者は十餘斤、小なる者は三、四斤、久しう齋すること至精、及び老子入山靈寶五符を佩ぶるに非ざれば、亦た此の輩を見るを得ること能わざるなり。…又た若し石象芝を得れば、之れを擣くこと三萬六千杵、方寸の匕を服し、日に三たび一斤を盡くさば、則ち千歳を得、十斤なれば則ち萬歳、亦た人に分かちて服すべし^{*13}。

ここは「石芝」、つまり「石象芝」について、その形状、服用方法、効果等について述べた箇所である。石象芝は「石、芝に象る^{*14}」ところからの命名であろう。『抱朴子』の記述はここに限らず、かなり具体的である。ここでは分量によって千歳から一萬歳の寿命が得られるとされる。

以下、諸芝について記述されるが、その内容を芝の名称と得られる寿命にしづつ簡単な表にあらわす。

『抱朴子』の芝の表

| 芝名 | 服薬量 | 寿命 | 芝の形状、その他 |
|---------|----------|----------|--|
| 石芝（百二十） | | | |
| 石象芝 | 一斤 十斤 | 千歳 萬歳 | 前掲参照。 |
| 玉脂芝 | 一升 | 一千歳 | 玉膏流出すること、萬年以上なれば則ち凝りて芝と成る。鳥獸の形に似る有り。色、常采無し。率ね多く山玄、水蒼の玉に似る ^{*15} 。 |
| 七明・九光芝 | 一斤 | 一千歳 | 皆な石なり。水に臨むの高山石崖の間に生ず。状、盤椀の如し。徑尺を過ぎず…莖蒂之れを連綴する有り。 |

九五年、所収) 八七～八八頁。海隅や島嶼に生ずるとすればサンゴ類という理解も可能であろう。しかし『抱朴子』自体は「珊瑚の如し」と、あくまでも珊瑚とは別のものという意識である。

*113石芝者石象芝。生於海隅名山、及島嶼之涯。有積石者。其状加（如）肉、象有頭尾四足者、良似生物也。附於大石、喜在高岫險峻之地。或却著仰綴。赤者如珊瑚、白者如截肪、黑者如沢漆、青者如翠羽、黃者如紫金。而皆光明洞徹如堅冰也。晦夜去之三百步、便望見其光矣。大者十餘斤、小者三、四斤、非久齋至精、及佩老子入山靈寶五符、亦不能得見此輩也。…又若得石象芝、擣之三萬六千杵、服方寸匕日三、盡一斤則得千歳、十斤則萬歳、亦可分人服也。

*114寺島良安『和漢三才図会』は「石芝ハ石ノ象ニテ海隅、石山、島嶼ノ涯ニ生ズ」と訓んでいる。

*115玉膏流出萬年以上、則凝而成芝。有似鳥獸之形。色無常采。率多似山玄水蒼玉也。

| | | | |
|---|----|---------------------------|---|
| | | | 起つこと三、四寸。七孔有る者、七明と名づく。九孔なる者、九光と名づく。光ること皆な星の如し ^{*116} 。 |
| 石蜜芝 | 一斗 | 萬歳 | 石柱有り。柱上、偃蓋石有り、高度徑、一丈許り。…戸上刻石為科斗字を為して曰く、服石蜜芝一斗を服する者、壽萬歳を得 ^{*117} 。 |
| 石桂芝 | 一斤 | 一千歳 | 名山の石穴中に生ず。桂樹に似て實は石なり。高さ尺許り、大なるものは徑尺。光明にして味辛、枝條有り ^{*118} 。 |
| 石中黃子 | 三升 | 千歳 | …大石中に在るは、赤黃溶溶、雞子の其の殻中に在るが如きなり。即ち當に之れを飲むべし。飲まざれば則ち堅く凝りて石と成る ^{*119} 。 |
| 石腦芝 | 一升 | 千歳 | 滑石中に生ずること、亦た石中黃子の状の如し。…其の石中に在るや、五色光明にして自ら動ぐ ^{*120} 。 |
| 石硫黃芝 | | 許由が服用して長生 ^{*121} | 五岳皆な有りて、箕山多しと為す ^{*122} 。 |
| 石硫丹 | | | 石の赤精、蓋し石硫黃の類なり。皆な崖岸の間に浸溢するなり。其の濡濕なる者、丸として服す可し、其の已に堅き者、散として服す可し。 ^{*123} 。 |
| 木芝（百二十種）（此の輩、復た百二十種有り、自ら圖有るなり ^{*124} ） | | | |
| 木威喜芝 | 一枚 | 三千歳 | 松の脂、淪みて地に入り、千歳、化して伏苓と為る。萬歳、其の上に小木を生ず。状、蓮花に似る。…陰に之れを乾かすこと百日、末として方寸匕を服す、日に三たび盡くし、一枚なれば則ち三千歳なり ^{*125} 。 |

*116皆石也。生臨水之高山石崖之間状如盤椀。不過徑尺、以還有莖蒂連綴之。起三四寸。有七孔者、名七明。九孔者、名九光。光皆如星。

*117有石柱、柱上有偃蓋石、高度徑可一丈許。…戸上刻石為科斗字曰、得服石蜜芝一斗者壽萬歳。

*118生名山石穴中、似桂樹而實石也。高尺許、大徑尺。光明而味辛、有枝條。

*119…在大石中、赤黃溶溶、如雞子之在其殼中也。即當飲之。不飲則堅凝成石。

*120生滑石中、亦如石中黃子。…其在石中、五色光明而自動。

*121言許由就此服之而長生

*122五岳皆有、而箕山爲多。

*123蓋石硫黃之類也。皆浸溢於崖岸之間、其濡濕者可丸服、其已堅者可散服。

*124此輩復有百二十種、自有圖也

*125松脂淪入地、千歲化爲茯苓。萬歲其上生小木。狀似蓮花。…陰乾之百日、末、服方寸匕、日三盡、一枚則三千歲也。

| | | | |
|-------------------------------------|----|-------|---|
| 千歳之柏木 | 十斤 | 千歳 | 其の下根、坐人の如し。長さ七寸、之れを刻まば血有り、其の血を以て足下に塗らば、以て水上を歩行し没(しず) まざる可し…*126。 |
| 飛節芝*127 | 十斤 | 五百歳 | 松樹枝三千歳なる者、其の皮中聚脂有り。状、龍形の如し。名づけて飛節芝と曰う。大なる者は重さ十斤、末にして之れを服す、十斤を盡くさば、五百歳を得るなり*128。 |
| 樊桃芝 | 一株 | 五千歳 | 其の木、昇龍の如く、其の花葉、丹羅の如く、其の實、翠鳥の如し。高さ五尺を過ぎず。末にして之れを服し、一株を盡くさば、五千歳を得るなり*129。 |
| 参成芝 | | 白日昇天 | 赤色にして光り有り。之れを扣くに枝葉、金石の音の如し。折りて之れを續(つ)がば、即ち復た故の如し*130。 |
| 木渠芝 | | 白日昇天 | 大木上に寄生すること蓮花の如し。九莖一叢、其の味、甘にして辛*131。 |
| 建木芝 | | 白日昇天 | 実は都廣*132に生ず。其の皮、纓蛇の如し、其の實、鸞鳥の如し*133。 |
| 黃蘆子 | | 千歳 | 黃蘆子・尋木華・玄液華、此の三芝、泰山の要郷及び奉高に生じ、得て之れを服する有れば、皆な人の壽をして千歳ならしむ*134。 |
| 尋木華 | | 千歳 | 同上。 |
| 玄液華 | | 千歳 | 同上。 |
| 黃蘆檀桓芝 | 一枚 | 地仙、不死 | 千歳の黃蘆木の下根、三斛の器の如きもの有り。…末にして之れを服し、一枝を盡くすを得れば、則ち地懲と成りて不死なり*135。 |
| 草芝（百二十種、天地と相い畢わらしむ。或いは千歳、二千歳を得*136） | | | |

*126其下根如坐人、長七寸、刻之有血、以其血塗足下、可以步行水上不沒…。

*127『太平御覽』卷九五三・九八六は飛節芝。

*128松樹枝三千歳者、其皮中有聚脂、状如龍形、名曰、飛節芝。大者重十斤、末服之、盡十斤、得五百歳也。

*129其木如昇龍、其花葉如丹羅、其實如翠鳥、高不過五尺…末服之、盡一株、得五千歳也。

*130赤色有光。扣之枝葉如金石之音。折而續之、即復如故。此三芝得服之白日昇天也。

*131…寄生大木上、如蓮花、九莖一叢、其味甘而辛。

*132本田済『抱朴子』28頁は「南方の山名。『淮南子』」とする。

*133實生於都廣、其皮如纓蛇、其實如鸞鳥。

*134黃蘆子・尋木華・玄液華、此三芝生於泰山要郷及び奉高、有得而服之、皆令人壽千歳。

*135服之者、千歳黃蘆木下根、有如三斛器。…得末而服之盡一枝、則成地懲不死也。

*136凡此草芝、又有百二十種、皆陰乾服之、則令人與天地相畢、或得千歳・二千歳。

| | | | |
|----------|-------|-----|---|
| 独搖芝 | 根の大魁 | 千歳 | 風無くして自ら動く。其の莖、大なること手指の如し、赤きこと丹の如し…、其の大魁を得て、末にして之れを服し、盡くさば則ち千歳を得、其の細き者一枝を服さば百歳 ^{*137} 。 |
| | 細き者一枚 | 百歳 | 同上。 |
| 牛角芝 | | 千歳 | 状、葱に似、特り生ざること牛角の如し。長さ三、四尺、青色 ^{*138} 。 |
| 龍巒芝 | 一枚 | 千歳 | 状、昇龍の相い負うが如きなり。葉を以て鱗と為し、其の根は則ち蟠龍の如し ^{*139} 。 |
| 麻母芝 | | | 麻に似て莖は赤色、花は紫色 ^{*140} 。 |
| 珠芝 | | | 其の花は黃、其の葉は赤、其の実は李の如くにして紫色。二十四枚輒ち相い連なりて垂ること珠を貫くが如きなり ^{*141} 。 |
| 白符芝 | | | 高さ四、五尺、梅に似、常に大雪を以て花あり、季冬にして実あり ^{*142} 。 |
| 朱草芝 | | | 九曲、曲に三葉有り。葉に三世有るなり ^{*143} 。 |
| 五徳芝 | | | 状、樓殿に似、莖は方、其の葉は五色、各おの具わりて雜えず。上は偃せた蓋の如く、中は常に甘露有り。紫氣起ること數尺 ^{*144} 。 |
| 龍銜芝 | | | 常に仲春を以て對生す。三節十二枝、根を下すこと坐人の如し ^{*145} 。 |
| 肉芝（百二十種） | | | |
| 萬歳蟾蜍 | | 四萬歳 | 頭上に角有り、頷の下に丹書八字有り、…得て陰に乾かし末にして、之れを服さば人の壽をして四萬歳ならしむ ^{*146} 。 |

*137無風自動。其莖大如手指、赤如丹…得其大魁、末服之盡則得千歳、服其細者一枝百歳。

*138狀似葱、特生如牛角。長三四尺、青色。末服、方寸匕、日三、至百日則得千歳矣。

*139狀似昇龍之相負也。以葉爲鱗、其根則如蟠龍。服一枝則得千歳矣。

*140似麻而莖赤色、花紫色。

*141其花黃、其葉赤、其實如李而紫色。二十四枚輒相連、而垂如貴珠也。

*142高四五尺、似梅常以大雪而花、季冬而實。

*143朱草芝九曲、曲に三葉有り。葉有三世也。

*144狀似樓殿、莖方、其葉五色、各具而不雜。上如偃蓋、中有甘露。紫氣起數尺矣。

*145常以仲春對生。三節十二枝、下根如坐人。

*146頭上有角、頷下有丹書八字…得而陰乾末、服之令人壽四萬歳。

| | | | |
|----------|-------|---|--|
| 千歳蝙蝠 | | 四萬歳 | 色白きこと雪の如し。…得て陰に乾かし末にして、之れを服さば人の壽をして四萬歳ならしむ ^{*147} 。 |
| 千歳靈龜 | 一具 | 千歳 | 五色具われり。其の雄の額の上、両骨起つこと角の似し。羊の血を以て之れに浴びせ、乃ち其の甲を剥取し、火もて炙り、擣き、方寸匕を服し、日に三たび一具を盡くさば、壽千歳 ^{*148} 。 |
| 小人 | 之れを服す | 僊 | 山中を行くに、小人、車馬に乗り、長さ七、八寸なる者、肉芝なり。捉び取りて之れを服さば即ち僊なり ^{*149} 。 |
| 風生獸 | 十斤 | 五百歳 | 豹に似る。青色、大なること狸の如し。…其の脳を取りて以て菊花に和え、之れを服すこと十斤を盡くして、五百歳を得るなり ^{*150} 。 |
| 千歳鷺 | 一頭 | 五百歳 | 其の色多く白にして尾掘す。取陰に乾かして末にし、一頭を服さば、五百歳 ^{*151} 。 |
| 菌芝（百二十種） | | | |
| | | 人をして昇僊せしめ、中なる者數千歳、下なる者千歳なり [*] 152。 | 或いは深山の中に生じ、或いは大木の下に生じ、或いは泉の側に生ず。其の状、或いは宮室の如く、或いは車馬の如く、或いは龍虎の如く、或いは人形の如く、或いは飛鳥の如し。五色常無し。自ら圖有り。皆な當に禹歩して往き、採取の刻、骨刀を以てす。陰に乾かして末にし、方寸匕を服す ^{*153} 。 |

これをみると、芝の内容が、ふくれあがっていることに気づく。とくに興味ぶかいのが、肉芝で、長生きした蟾蜍（＝ヒキガエル）、蝙蝠、亀、小人、風生獸、燕などがあげられている。これは長寿のものを食べると長寿になるという発想であろう。

*147色自如雪…得而陰乾末、服之令人壽四萬歳。

*148五色具焉。其雄額上兩骨起似角、以羊血浴之、乃剥取其甲、火炙、擣、服方寸匕日、三盡一具、壽千歲。

*149行山中、見小人乘車馬、長七八寸者、肉芝也。捉取服之即僊矣。

*150似豹。青色、大如狸…取其脳、以和菊花、服之盡十斤、得五百歲也。

*151其色多白而尾掘、取陰乾末、服一頭、五百歲。王明『抱朴子内篇校釈』中華書局、1980年は「屈」に通ずとする。

*152令人昇僊。中者數千歳、下者千歳也。

*153或生深山之中、或生大木之下、或生泉之側、其状或如宮室、或如車馬、或如龍虎、或如人形、或如飛鳥、五色無常、亦百二十種、自有圖也。皆當禹步往、採取之刻、以骨刀。陰乾末服方寸匕。

それらの中に菌芝がある。菌はキノコである。つまりキノコは五種の芝のうちの一つである。けれども、後世、それが一般化する。

図像にみえる芝

後漢の画像石にみえる羽人が手にもつものが、「芝」とされている。片手に芝をもち、それを捧げる図には類型がある。エジプトにミイラに睡蓮を捧げる図があり、それは花が蓮になつたりしながら、イランやインド、それに東南アジアにまで広がっている。

睡蓮を図像化したものをパルメットと呼ぶ。これはアロイス・リイグル『美術様式論：装飾史の基本問題¹⁵⁴』の中でとりあげられ、この文様がどのようにしてヨーロッパに伝わったかが詳細に検討されている。けれどもリイグルは中国に目を向けておらず、中国は空白となっている。そのためリイグルの書物を翻訳した長廣敏雄氏は「唐代の唐草文様¹⁵⁵」「唐代の唐草文様」補遺¹⁵⁶で唐代の唐草文様について考察している。そこでは漢代のパルメットについては言及されていない。このようにパルメット文様は中国にも伝わっている。さらに早い時期である戦国時代から漢代にかけて中国に入ったものが「芝」となつたようである。

文様の伝播には理由がある。多くの場合、その文様が辟邪あるいは吉祥の意味をもつてゐる。パルメットは睡蓮のもつ復活のイメージを強く受けている。夜には花を閉じて水に潜って眠り、朝には水から出て花を開く。これは太陽と連動して復活するようにみえる。この文様が墓室にえがかれるのは本来、被葬者を復活再生させる、あるいは天界へと生まれ変わらせようとするのであろう。

『山海經』にみえる不死薬

『史記』以外にも不死薬が『山海經』海内西經にみえる。

開明の東に巫彭、巫抵、巫陽、巫履、巫凡、巫相有り、寢竈（あつゆ）の戸（しかばね）を夾（さしささ）み、皆な不死の薬を操りて以て之れを距（ふせ）ぐ。寢竈なる者は、蛇身人面、貳負臣（じふしん）の殺す所なり¹⁵⁷。

ここでは、「戸」に不死薬を使用している。「距」をここでは「ふせぐ」と読み、戸体の腐敗をせぐことではないかと解した。不死薬はそのための薬ではないか。

ここに郭璞は、

死氣を距ぎ卻（しりぞ）け、更（ふたた）び生まれんことを求むるを為す¹⁵⁸。

*154長廣敏雄訳、座右宝刊行会、1942年。

*155佛教藝術學會編『佛教藝術』8号、毎日新聞社、96～115頁、1950年。

*156同上、9号、76～77頁、1950年。

*157開明東有巫彭、巫抵、巫陽、巫履、巫凡、巫相、夾寢竈之戸、皆操不死之薬以距之。寢竈者、蛇身人面、貳負臣所殺也。

*158爲距却死氣求更生。

と述べている。ここの「更生」は「再生する^{*159}」と解しうる。

「窶窳」は海内南經、海内經にもみえ、いずれも「窶窳龍首」とあらわされる。また「食人（人を食らう）」とされている。南經の郭璞注は、「窶窳、本と蛇身人面、貳負臣の殺す所と爲る、復た化して此の物と成るなり^{*160}」と、蛇身人面の窶窳が再生復活して龍首となつたと解している。『爾雅』积獸では「貔貅」とあらわされ、「類獮、虎爪、食人、迅走」とある。そこでは獸とされている。

しかし『山海經』北山經には「其神皆蛇身人面」とあり、「蛇身人面」の「神」である。南山經では「其神、皆龍身而人面」とあり、「龍身人面」もまた神である。大荒東經の「雷獸」も、注に「雷獸即雷神也。人面龍身」とあり、獸と呼ばれていても、やはり人面龍身の神とされている。

「窶窳」は怪獸のように受け取られることがあるが、本来はそうではないだろう。六名もの巫が「戸」を取り囲み、腐敗をふせぎ、さらには再生を願っているような表現である。『山海經』には物産として「丹」が多出し、「丹粟（注に丹砂）」（南山經）などさらに細分化した名称もみえる。ここで不死の薬は薬物の具体的な内容は不明であるが、復活を象徴する「芝」や腐敗を防ぐ「丹砂」などが意識されていたかもしれない。

「窶窳」や「貳負臣」という固有名詞は文字の意味を取りづらい。外来語の音訛かもしれない。「窶窳」が「貔貅」とも記されるのは音が同じだからだろう。「貳負臣」は『山海經』海内北經では「貳負之戸」「貳負神」とされる。ここでは「窶窳」と同様に「戸」とされ、また「神」ともされる。貳負神は「一曰、貳負神在其東、人面蛇身」とされ、「蛇身人面」の窶窳と同様である。

『山海經』では「人面」という表現が 76 みえる。これは「人面蛇身」のような人面と禽獸の身体という組み合わせが多い。また「人身」は 9 みえる。この場合は「人身龍首」や虎首などである。こういった合成動物は殷代の青銅器にすでにみえるが、その淵源はメソポタミアやエジプトではないか。そこではこのような合成動物や神が数多くみえる。中国にも外国の神話伝説が当時、伝わっていたのではないかと思わせる。もし、推測がゆるされるならば、「窶窳」はオシリスで「貳負臣」はセトではないか。オシリスは弟のセトに殺されるが、イシスによってミイラにされ、復活を果たすのである。そのように考えれば『山海經』の不死の薬は復活薬ということになる。蛇は復活の象徴^{*161}とされることがあり、そのなかで、「蛇身人面」という形状は意味をもってくるのかもしれない。

三、『論衡』の霞を食べる仙人^{*162}

*159前掲『字通』更生。また『漢語大詞典』（羅竹風主編、漢語大詞典編輯委員会、漢語大詞典編纂處編纂、上海辞書出版社、1986 年）第一巻、527 頁、更生は「新生、重新獲得生命」、更（第 4 声）生に「再生」という解釈を載せる。そして「更（第 4 声）」は「再」とする。

*160窶窳本蛇身人面、爲貳負臣所殺、復化而成此物也。

*161小島理禮編著『蛇の宇宙誌：蛇をめぐる民俗自然誌』東京美術、1991 年を参照。

*162拙稿の講演よりはあとになるが、円満字二郎氏が 2014 年よりあらわしているブログ

後漢、王逸の『楚辞章句』遠遊に「吾れ將に王喬に從いて以て娛戯す^{*163}」とみえ、章句は「上は真人に從い與に戯戯するなり^{*164}」とみえる。真人の王喬に従って戯戯するという。そのあとに、

六氣を餐して沆瀣^{*165}（こうかい）を飲み、正陽に漱（くちすすぎ）て朝霞を含む^{*166}

とみえる。ここに「餐」「飲」とみえ、朝霞に関しては「含」とみえる。

こここの章句は、

日精を食呑し、元符を食らうなり。凌陽子明經に言う、春に朝霞を食らう、と。朝霞とは、日始めて出（い）づるの赤黄氣、秋には淪陰を食らう、淪陰とは、日没以後の赤黄氣なり。冬には沆瀣を飲む、沆瀣とは、北方夜半の氣なり。夏には正陽を食らう、正陽とは、南方日中の氣はれなり。天地玄黃の氣を并（あわ）せ、是れ六合の氣と為す^{*167}。

「朝霞」は、日の出の赤黄の氣という。沆瀣は、北方の夜半の氣とされているが、白川静は、「夜間の水氣。露。仙人の飲物^{*168}」と解している。「飲」なので、その方がわかりやすい。

神明の清澄を保ち、精氣入りて粗穢除かる^{*169}。

朝霞を含んだ結果、神明（精神）の清澄が保たれ、精気が体内に入つて粗穢（きたないもの）が除かれる、とある。

うしろの句につけられた章句は、

新を納（い）れ故を吐き、垢濁清らかなり^{*170}

「雨の漢字の物語」（2014. 2—2015. 7）第14話 仙人の食べるもの——「霞」は何色か（2015. 4）？<http://www.gei-shin.co.jp/community/28/14.html>が霞について考察している。この書は『雨かんむり漢字読本』、草思社、2018年として刊行されている。

*163吾將從王喬以娛戯。

*164上從真人與戯戯也。

*165冬飲沆瀣。沆瀣者、北方夜半氣也。

*166餐六氣而飲沆瀣兮、漱正陽而含朝霞。

*167食呑日精、食元符也。凌陽子明經言、春食朝霞、朝霞者、日始出赤黄氣…。秋食淪陰、淪陰者、日没以後赤黄氣也。冬飲沆瀣、沆瀣者、北方夜半氣也。夏食正陽、正陽者、南方日中之氣是也。并天地玄黃之氣、是爲六合氣也。

*168前掲『字通』沆瀣。

*169保神明之清澄兮、精氣入而粗穢除。

*170納新吐故垢濁清也。

とみえる。

新しい気を取り入れ、古い気を吐き出すことである。

『漢書』司馬相如伝にも、

沆瀣を呼吸して朝霞を餐し、芝英を咀嚼（そしゃく＝咀嚼）し瓊華（けいか）を嘰（くら）う^{*171}。

と、呼吸という言葉もみえる。

ここでは、それに加えて芝英を咀嚼し、瓊華をくらうとみえる。朝霞は呼吸であるが、「餐す」である。口から呼吸することは、同じく口からとりいれる飲食と同じということなのだろう。

『列仙伝^{*172}』の赤鬚子は、

赤鬚子は豊の人なり、豊中世に伝えて之れを見ると云う。秦の穆公の時、主魚の吏なり、數（しば）しば豊界の災害水旱を道（い）い、十に一を失なわず。臣下帰向し、迎えて之れを師とし、従いて業を受け、長ずる所を問う。好んで松實、天門冬、石脂を食らい、歯落ちて更（あらた）めて生え、髪墮ち再び出づ、霞を服すること絶後たり。遂に呉山の下に去り、十餘年、之く所を知る莫じ^{*173}。

と、霞を服すことが説かれている。

赤鬚子の赤は、赤い霞を服用していることと関連するかもしれない。

辞書の記述でも霞は赤い雲気である。後漢、許慎撰、宋、徐鉉增釋『説文解字』卷十二、雨部、霞では、

赤雲氣也^{*174}。

とみえる。

『廣韻』にも「赤氣騰（のぼ）りて雲と爲る^{*175}」とみえる。つまり、赤雲氣である。『漢

*171呼吸沆瀣兮餐朝霞、咀嚼芝英兮嘰瓊華。司馬相如「大人賦」は嘰咀芝英兮、嘰瓊華。注に「徐廣曰、嘰音祈、小食也」。

*172尾崎正治、平木康平、大形徹著『抱朴子・列仙伝』角川書店、1988年を参照。以下の注釈はそこについた大形のものを参照している。

*173赤鬚子、豊人也、豊中伝世見之云。秦穆公時主魚吏也、數道豊界災害水旱、十不失一。臣下帰向、迎而師之、従いて業を受け、間所長。好食松實、天門冬、石脂、歯落更生、髪墮再出、服霞絶後。遂去呉山下、十餘年、莫知所之。

*174赤雲氣也。

*175赤氣騰爲雲

日詞典』霞でも「朝焼け、夕焼け¹⁷⁶」とみえる。

『論衡』の道虚篇、つまり仙人の話は虚妄だということを説く篇のなかに、

曼都、道を好み仙を學び、家を委（す）てて亡去し、三年にして返る。家、其の狀を問う、曼都曰わく、「去りし時、自ら知る能わざるも、忽ち臥するが若きの形を見る。仙人數人有り、我を將（ひき）いて天に上り、月を離ること數里にして止む。月の上下を見るに幽冥、幽冥にして東西を知らず。月の旁に居り、其の寒きこと淒愴。口饑え食らわんと欲するに、仙人輒ち我に飲ますに流霞一杯を以てす。一杯を飲む毎に、數月饑えず。幾何（いくばく）の年月を去るやを知らず、何を以て過ごすと爲すやを知らず、忽然として臥するが若く、復た下りて此に至る」と。河東之れを號して斥仙（せきせん=謫仙と同じ）と曰う。實に論者之れを聞き、乃ち然らざるを知る¹⁷⁷。

ここにみえる流霞は飲み物のようであり、それを飲むと数ヶ月は飢えないという。

『抱朴子』祛惑篇は、

又た河東蒲阪に項舅（曼）都なる者有り、一子と與に山に入り仙を學び、十年にして家に歸る、家人其の故を問う。舅都曰わく、「山中に在りて三年精思し、仙人有り來たりて我を迎う、共に龍に乗りて天に升る。良（や）や久しくして、頭を低（た）れて地を視るに、窈窕冥冥、上は未だ至る所有らずして、地を去ること已に絶遠。龍行くこと甚だ疾（はや）し、頭昂（たか）く尾低（た）れ、人をして其の脊上に在らしむれば、危怖嶮巇。天上に到るに及び、先ず紫府を過（よ）ぎるに、金床玉几、晃晃昱昱、眞に貴處なり。仙人但だ流霞一杯を以て我に與う、之れを飲まば輒ち饑渴せず」と¹⁷⁸。

と紹介したあと、「此れ妄語なること爾（かく）の乃（ごと）し」と切り捨てている。

曼都の話は、『論衡』と『抱朴子』で否定されているにもかかわらず、「流霞一杯」と飲み物のように形容されている。

日本でも、当初は朝焼けの氣である。『倭名類聚抄』一雲雨、霞に「唐韻云、霞赤氣雲也」とみえる。『俳諧歲時記葉草』春・三月には、「霞の命、仙人は霞を服して命をのぶるものなれば、長きことによせていふなり」とみえる。ここでは霞を服すことによって延命

*176吉林人民出版社、1982年。

*177曼都好道學仙、委家亡去、三年而返。家問其狀、曼都曰、「去時不能自知、忽見若臥形、有仙人數人、將我上天、離月數里而止。見月上下幽冥、幽冥不知東西。居月之旁、其寒淒愴。口饑食欲、仙人輒飲我以流霞一杯。每飲一杯、數月不饑。不知去幾何年月、不知以何爲過、忽然若臥、復下至此」。河東號之曰斥仙。實論者聞之、乃知不然。

*178又河東蒲阪有項曼都者、與一子入山學仙、十年而歸家、家人問其故。曼都曰、在山中三年精思、有仙人來迎我、共乘龍而升天。良久、低頭視地、窈窕冥冥、上未有所至、而去地已絶遠。龍行甚疾、頭昂尾低、令人在其脊上、危怖嶮巇。及到天上、先過紫府、金床玉几、晃晃昱昱、眞貴處也。仙人但以流霞一杯與我、飲之輒不饑渴。

できるとされている。有島武郎（1878 - 1923）『或る女』(後・二九)の「二人は霞を食つて生きる仙人のやうにしては生きてゐられないのだ」にも、霞を食うことが記されている。『日本国語大辞典』の霞の条は、この部分をひいて「かすみを食う 仙人などが超人間的な力を得て存在することをたとえている」と述べている。ただ『或る女』の文脈では、霞を食うならば、お金はかかるない、といった意味で使われているように思われる。

霞は「服す」、あるいは「食う」とされている。

四、『列仙伝』などの丹（水銀）の服用

丹砂や水銀を仙薬として服用した例をいくつかあげる。

梁、蕭統（501 - 531）撰『文選』卷四、左思（252-307?）の蜀都賦によれば、

丹沙絶纈として其の坂に出で、蜜房郁毓として其の阜を被う。山圖采りて道を得、赤斧服して朽ちず^{*179}。

とみえる。

「服して朽ちず」という表現は、仙人の肉体をさしたものではあるが、あとで考察する遺体の腐敗防止とつながっているようにみえる。山図と赤斧はともに『列仙伝』にみえる仙人の名である。赤斧は次のように記される。

赤斧は巴戎の人なり。…能く水汞を作り、丹と消石とを鍊り、之れを服すること三十年、反りて童子の如し。毛髮生じて皆な赤し…手掌中に赤斧有り^{*180}。

ここでは「水汞を作り、丹と消石とを鍊り」と、まず「水汞」すなわち水銀をつくり、ついでその水銀と消石とをねりあわせたようだ。それを服用して30年たち、若返りして童子のようになったという。

晋、葛洪（283-343）の『抱朴子』内篇、卷一、金丹第四は、そのほとんどすべてが丹砂の服用の話であり、数多くの例がのせられている。

呼吸道引、及び草木の薬を服さば、年を延ばすを得可きと雖も、死より免れざるなり。神丹を服さば人壽をして窮まる無からしむるのみ…^{*181}。

と、神丹の服用のみが人の寿命を無窮にさせるという。そのあと九丹の製法などが記されている。たとえば、

第六の丹、煉丹と名づく。之れを服すること十日、仙なり。又た汞を以て合わせて之

*179丹沙絶纈出其坂、蜜房郁毓被其阜、山圖采而得道、赤斧服而不朽。

*180赤斧者、巴戎人也、…能作水煉丹、與硝石服之、三十年反如童子、毛髮生皆赤。…手掌中有赤斧焉。

*181雖呼呼吸道引、及服草木之藥、可得延年、不免於死也。服神丹令人壽無窮已…。

れを火すれば、亦た黄金と成る^{*182}。

他の丹は、服用の日数に、即日から百日までと差があるので、いずれも仙となるとう。

唐、段成式（803? - 863?）の『酉陽雑俎』には死亡した妻に丹薬を飲ませる話が記されている。

…老人、其の丹、三丸を遺りて言う、急事有らば即ち服せよ。歳餘、妻暴かに卒す。數日、老人の丹の事を憶うに方り、乃ち歯を毀ち之れを灌ぐに、微かに緩氣有り。顔色生けるが如し。今、死して已に四年、狀、沈醉するが如し。爪甲も亦た長ず…^{*183}。

『唐書』藝文志は『酉陽雑俎』を小説家に分類する。この記事を事実とみなすのは難しが、ここでは丹の丸薬により死者が生き返ったとされる。身体は暖かいが、意識はもどらなかつたようだ。

『抱朴子』内篇、卷一、暢玄第一には「太乙招魂丹法」・「召魂小丹三使之丸」と招魂魄、召魂の丹がみえる。反魂、返魂の丹であろう。『酉陽雑俎』の話には『抱朴子』の影響もあるのだろう。

玉の服用

『抱朴子』内篇、卷一、僊薬第十一では、

…玉屑は之れを服するに、水と與に之れを餌さば、俱に人をして死せざらしむ。

と、玉の効用が説かれる。

さらに、

玉も亦た僊薬、但だ得難きのみ。玉經に曰く、金を服する者は壽、金の如し、玉を服する者は壽、玉の如し^{*184}。

とみえる。

ここでは、金や玉を服用するという。「寿、金石の如し^{*185}」は鏡の銘文の常套語句である。「玉」と「石」は異なるが、鏡銘等の吉祥語の影響もあるのだろう。

金玉は生者のみならず、死者の肉体の永遠性とも関連する。漢、劉歆撰、晉、葛洪輯『西

*182第六之丹名煉丹。服之十日、仙也。又以汞合火之、亦成黄金。

*183…老人、遺其丹、三丸言、有急事即服。歳餘妻暴病卒。數日、方憶老人丹事、乃毀齒灌之、微有緩氣。顔色如生。今死已四年矣、狀如沈醉、爪甲亦長…。

*184玉亦僊薬、但難得耳。玉經曰、服金者壽如金、服玉者壽如玉也

*185樋口隆康『古鏡』新潮社、1979年、372頁、鏡銘分類表の銘式符号Kに「…壽如金石…」とみえる。

京雜記』卷六では、

晋の靈公の冢…、兆尸猶お壞れず、孔竅中、皆な金玉有り。

とされている。

晋の靈公は在位、前 620–608 年であり、この冢は劉歆の頃から、およそ五百年以上前につくられたものである。『抱朴子』対俗は「金玉、九竅に在れば乃ち死人之れが爲に朽ちず。況んや服食をや」という。『抱朴子』のこの記述も『西京雜記』のこの記事を根拠として書かれているのかもしれない。

ただし、李時珍の『本草綱目』水銀に引く『抱朴子』は「金汞、九竅に在れば乃ち死人之れが爲に朽ちず。況んや服食をや」となっている。ここでは「金玉」ではなく「金汞」つまり金や水銀となっている。李時珍の引用に誤りがあるのかもしれない。だが、わざわざ水銀のところに、この記事を引くのは李時珍がそのように認識していたからであり、おそらくそれは事実にも合致するのだろう。

『抱朴子』は金玉の効果で尸体が朽ちないという。ここでも尸体を腐敗させない薬物が仙人となるための仙薬とされているのである。

生けるがごとき尸体の例のなかに実際に玉が使用されているものがある。『本草綱目』玉は、蜀医、唐慎微の『証類本草』の文章を引用する。これは北魏の李預の玉の服用例をあげ、玉が実際に防腐効果を挙げていることを示している。

後魏の李預、餐玉の方を得、乃ち藍田を采訪す。掘りて環璧襍（ざつ）器の形の若き者、大小百余枚を得。捶（つ）きて屑と作し、日び之れを食らい、年を経て效驗有りと云う。而れども酒を好み志を損す。疾篤きに及び、妻子に謂いて曰く、「玉を服するは、當に山林に屏居し、嗜欲を排棄すべし。而れども吾れ酒色絶たず、自ら死を致す。藥の過（あやまち）に非ざるなり。尸体必ず當に人に異なること有るべし。速やかに殯せしむる勿かれ。後人をして餐服の功を知らしめよ」と。時に七月中旬、長安毒熱なるも、尸を停むること四日にして、體色變ぜずして、口に穢氣無し^{*186}。

李預は古人の餐玉の法を羨んで藍田で手に入れた玉を屑にして、日々、これを食らったという。食事として玉を食べたという話である。

李預の死後、遺言により、七月の暑熱厳しいおりにも関わらず殯斂しなかつたが、四日間たっても体色は変じなかつた。『魏書』によれば、李預の妻の常氏が、玉珠二枚を含玉として口に含ませようとしたときも、口からは穢気がたちのぼらなかつたとされる。事実ならば、死後、ひどい暑気にもかかわらず、体内は腐敗していなかつたということになる。これはこれまでみてきた尸体が腐敗しなかつた例と比べても首肯できる話であろう。

*186後魏李預得餐玉之法、乃采訪藍田、掘得若環璧襍器形者、大小百餘枚、槌作屑、日食之。經年云、有效驗、而好酒損志、及疾篤、謂妻子曰、服玉當屏居山林、排棄嗜欲、而吾酒色不絕、自致於死、非藥之過也。尸體必當有異於人、勿使速殯令後人知餐服之功、時七月中旬、長安毒熱、停尸四日、而體色不變、口無穢氣。

李預の妻の常氏は、小歛で李預の尸体を棺におさめる時に、残りの玉屑を棺中に入れている。これは李預の遺志によるのであろうが、古来、玉を埋葬に使う事は多かった。

丹以外に鉱物質の薬物は、その殺菌作用により、遺体を腐敗させずに保存させる力があった。尸解仙は復活観念と重なりあうように思われる。ここはそのイメージ形成にも役立つているようである^{*187}。

雲母服用の例

『抱朴子』卷二、仙薬第十一では次のように記される。

雲母…五雲は以て猛火の中に納れ、時を経るも終に燃えず。之れを埋むるも永しえに腐敗せず。故に能く人をして長生せしむるなり^{*188}。

と。この部分は『本草綱目』雲母にも引用されている。

『抱朴子』では、「金丹」は草木薬と異なって、火に入れても消滅せず、土に埋めても朽ちない、と説明される。仙薬としての「雲母」の説明も同様の原理による。『抱朴子』にみられる雲母や金丹など鉱物性の薬物の効用の記述は、さきにみたような尸体に対する実際の効果とも関連しているのであろう。とくに『西京雜記』には葛洪の序文があり、葛洪はそのような事実を明確に認識していたと思われる。

五、『列仙伝』と『神農本草經』

『列仙伝』の 70 の説話のうち 43 に薬あるいは薬物の名があらわれる。薬物の種類は 50 あり、その総数はのべにして 60 以上ある。薬効としては一、不老・長生・若返り。二、仙人の超越的能力をひきだす。三、病氣・疫病の治療、の三つに大別される。「服する者、皆、二、三百歳に至る」と薬の効用によって長寿を得たと明確に記されるものもある。しかし、そのすべてにこのように明確な因果関係が述べられるわけではない。『列仙伝』に薬物が多くあらわれることから、この書の作成には採薬の方士が関与していたのではないかと推測した^{*189}。

『神農本草經』は、当時、存在していたと思われる薬物書をベースにして、そこにあつた薬物を上薬・中薬・下薬に振り分けている。薬物は本来、治病の薬であるが、病でないときに飲むとかえって身体をこわすような毒薬は下薬を入れた。そして中薬を養性(養生)

*187このあたりの例は、拙著『不老不死』（講談社、1992 年）、拙稿「尸解仙と古代の葬制のかかわりについて」、「中国研究集刊」戻号、pp.47~72、1993 年)、拙稿「道教における神仙思想の位置づけ—尸解仙の事例を手がかりとして—」、国際日本文化研究センター『道教と東アジア文化』、国際シンポジウム 13 集、pp.65~80、2000 年)で取り上げているが、ここでは食事という観点から考察した。

*188五雲以内猛火中、經時終不燃、埋之永不腐敗、故能令人長生也。

*189拙著『不老不死』および拙稿「『列仙伝』にみえる仙薬について」、「人文学論集」第 6 集、1~19 頁、1988 年を参照。

の健康薬とし、上薬を養命の仙薬としたのである^{*190}。薬物の総数は、上薬・中薬がそれぞれ 120 種、下薬が 125 種、あわせて 365 種である。しかしながら、『神農本草經』は、後世の本草書に本經とあったものからの輯本である。そのため、森立之のものと孫星衍のものとでは、分類に若干の異同がある。『神農本草經』のあと『名医別錄』が 730 あまりの薬物を収載した。730 は 365 の倍となっている。当時の薬物を数えた結果、この数となつたのではないだろう。許慎は『説文解字』の部首を 540 としたが、それは『易』の 9 (陽) と 6 (陰) の乗数の 10 倍だとされているのである^{*191}。

『列仙伝』と『神農本草經』に共通する薬物は 33 種ある。そのうち上薬に相当するものは 26 種にのぼり、中薬は 5 種、下薬は 2 種である。『神農本草經』の上薬には「久服」という言葉が数多く使われている。「久服」とは、薬物を久しく服用することである。現在にいたるまで漢方薬にはずっと飲み続けなければいけないというイメージがある。ところが、この「久服」という言葉は、それまであった薬物書に後から付加されたようにみえる。「久服」の前には薬物に対する一般的な記述があり、「久服」の後には「久しく服さば、身を軽くし年を延ばす…」といった仙薬的效果が記される。

仙薬的效果をさらにあげれば、延年・長年・増年・増寿・益寿・不老・耐老・不死・不夭などは、老いずに長生きすること。明目・耳目聰明・好顔色・令人光沢・頭不白・強骨筋・益精などは、老化しないことの肉体的特徴。益氣力・益智・聰察・不忘・令人不忘・不迷・安心などは老化しないことの精神的特徴。神仙・通神明・通神は神仙になること。軽身・令人身軽・飛行千里・能行水上は方術的能力をもつこと。耐寒暑・不飢・不飢渴・耐飢は肉体における超越的能力をもつこと。除邪・殺邪氣は辟邪である。

これらをみれば『神農本草經』の神仙觀^{*192}が、うかがわれる。中尾万三が、「採薬の方士のつくったもの^{*193}」というのは首肯できる。方士たちが、『神農本草經』を上、中、下の三つに分類し、「久服」の効果を付け加えたのだろう^{*194}。

さて、『神農本草經』の「久服」に対して、『列仙伝』では「常食」という語がみえる。『列仙伝』の仇生は「常食松脂」によって「三十餘年而更壯（三十餘年にして更に壯（さか）ん）」とされた。これは『神農本草經』上薬・松脂では「久服輕身、不老延年」である。『列仙伝』の彭祖は「常食桂・芝」の結果、「昇仙而去」とされ、『神農本草經』で上薬・牡桂は「久服通神、輕身不老」、上薬・菌桂は「久服、輕身不老」、上薬・赤・黒・青・白・黃・紫芝は「久食、輕身不老、延年神仙」とされている。同じ薬物に対して、「食」であったり、「服」であったりということになる。身体に塗ったり、帶びたりするものは食べ物ではない。しかし、口から取り入れる限り、食べ物と薬の差は少ないのかも知れない。

以下、『列仙伝』で薬物、飲食に関するものを列挙する。薬物に関する記述が多いが、ごくわずかだが五穀や魚、葱や薤（おおにら）などがみえ、また酒や水に関する記述もある。

*190 同上。

*191 阿辻哲次『漢字学：『説文解字』の世界』東海大学出版会、1985 年を参照。

*192 拙稿「『神農本草經』の神仙觀」、「東方宗教」77 号、22～49 頁、1991 年を参照。

*193 「漢書芸文志より本草衍義に至る本草書目の考察」。

*194 「本草と方士の関係について」、「人文学論集」第 8 集、47～66 頁、1990 年を参照。

る。それらは一般的の飲食に近い。また「常食」という表現は食事といつてもよいだろう。

『列仙伝^{*195}』

上巻

赤松子

水玉を服して以て神農に教う…炎帝の少女之れを追い、亦た仙を得て、俱に去る^{*196}。

馬師皇

黃帝の時の馬醫なり。馬形生死の診を知り、之れを治して輒ち愈ゆ。…「此の龍、病有り、知我れの能く治するを知る」と。乃ち其の唇下の口中に鍼し、甘草湯を以て之れに飲ませば、而（すなわ）ち愈ゆ。後數數、疾有らば、龍、其の波より出でて告げ、之れを治さんことを求む。一旦、龍、皇を負いて去る^{*197}。

赤将子與

五穀を食らひて百草の花を噉（くら）う。…能く風雨に隨いて上下す。

※五穀も食べている^{*198}。

偓佺

槐山の採藥父なり、好んで松實を食らい…能く飛行し走馬を逐う。松子を以て堯に遺るも、堯服するに暇（いとま）あらざるなり。松とは簡松なり。時人受けて服する者、皆な二三百歳に至る^{*199}。

※偓佺は採藥父とされている。

方回

雲母を煉食し、亦た民人の有病有る者に與う。…時人言、回の一丸を得て門に泥塗すれば、戸終に開く可からず^{*200}。

閨令尹

苴勝の實を服し、其の終わる所を知る莫し^{*201}。

涓子

好んで朮を餌し、其の精を接食す。三百年に至りて乃ち齊に見（あらわ）る^{*202}。

呂尚

*195 『列仙伝』の薬物を中心に、寿命、仙人としての能力に関する部分を抜き書きした。『列仙伝』各話の内容は前掲拙著『列仙伝』を参照。『列仙伝』と『神農本草經』の対照表は前掲拙稿「『列仙伝』の仙薬」を参照。

*196 服水玉以教神農…炎帝少女追之、亦得仙、俱去。

*197 黃帝時馬醫也。知馬形生死之診、治之輒愈。…「此龍有病、知我能治」。乃鍼其唇下口中、以甘草湯飲之而愈。後數數有疾龍出其波告、而求治之。一旦、龍負皇而去。

*198 食五穀而噉百草花。…能隨風雨上下。

*199 槐山採藥父也、好食松實…能飛行逐走馬。以松子遺堯、堯不暇服也。松者、簡松也。時人受服者、皆至二三百歲焉。

*200 煉食雲母、亦與民人有病者。…時人言、得回一丸泥塗門、戸終不可開。

*201 服苴勝實、莫知其所終。

*202 好餌朮、接食其精。至三百年乃見於齊。

澤芝・地・髓を服し、且に二百年にならんとして亡を告ぐ。難有りて葬らず、後ち、子の伋之れを葬らんとするに、屍無く、唯だ玉鈴六篇のみ棺中に在る有りと云う^{*203}。

師門

桃李の葩を食らう。孔甲…殺して之れを外野に埋む。一旦、風雨ありて之れを迎う^{*204}。

務光

蒲・韭の根を服す…。遂に石を負いて自ら蓼水（りょうすい）に沈む、已（すで）にして自ら匿る。後ち四百餘歳、武丁の時に至りて、復た見（あらわ）る^{*205}。

仇生

常に松脂を食らう^{*206}。

彭祖

八百餘歳。常に桂・芝を食らい、導引行氣を善くす^{*207}。

邛疏

能く氣を行（めぐ）らし形を煉（ね）り、石髓を煮て之れを服す、之れを石鐘乳と謂う。數百年に至り…^{*208}。

陸通

橐蘆（たくろ・はぜ）木の實及び蕪菁子（ぶせいし・かぶらのみ）を食らう。…數百年を歴て去る^{*209}。

葛由

綏山（すいざん）の一桃^{*210}

范蠡

好んで桂を服し水を飲む。…蘭陵に藥を賣る^{*211}。

寇先

魚を釣るを以て業と爲す、…百餘年。魚を得、…或いは自ら之れを食らう。…好んで荔枝を種（う）え、其の葩實を食らう^{*212}。

※魚を食べている。

安期先生

藥を東海の邊（ほとり）に賣る。時人皆な千歳の翁と言う^{*213}。

*203服澤芝地髓、且二百年而告亡。有難而不葬、後子伋葬之、無屍、唯有玉鈴六篇在棺中云。

*204食桃李葩。孔甲…殺而埋之外野。一旦、風雨迎之。

*205服蒲韭根…。遂負石自沈於蓼水、已而自匿。後四百餘歳、至武丁時、復見。

*206常食松脂。

*207八百餘歳。常食桂芝、善導引行氣。

*208能行氣煉形。煮石髓而服之、謂之石鐘乳。至數百年…。

*209食橐蘆木實及び蕪菁子。…歴數百年去

*210綏山一桃

*211好服桂飲水。…蘭陵賣藥。

*212以釣魚爲業、…百餘年。得魚、…或自食之。…好種荔枝、食其葩實焉。

*213賣藥於東海邊。時人皆言千歲翁。

桂父

常に桂及び葵（あおい・ふゆあおい）を服し、龜脳を以て之れに和す、千丸に十斤の桂、累世之れを見る。今荊州の南に尚お桂丸有り^{*214}。

環丘仲

藥を甯に賣ること百餘年、人以て壽と為す。…仲死し、民人、仲の屍を取り、水中に棄て、其の藥を収めて之れを賣る。仲、葵（かわごろも）を披（き）て從いて之れに詣り、藥を取る^{*215}。

酒客

梁の市上の酒家のなり。酒を作りて常に美（うま）し…後ち百餘歳にして來たり…曰く、「三年にして當に大いに饑うべし」と。卒に其の言の如し^{*216}。

任光

善く丹を餌し、都市里の間に賣る。積むこと八九十年、乃ち知る是れ故時の任光なり。皆な說く數十歳の面頬の如し…三世在る所を知らず。晉人常に其の丹を服するなり^{*217}。

脩羊公

略（ほ）ぼ食らわず、時に黃精（アマドコロ）を取りて之れを食らう。…牀上化して白羊と爲る^{*218}。

崔文子

後ち黃散・赤丸を作り…藥を都市に賣る、自ら三百歳と言う。後ち疫氣有り、民の死する者萬もて計う。長吏、文の所に之きて救わんことを請う。文、朱幡を擁し、黃散を繫（か）け、以て人門に徇（とな）う。散を飲む者即ち愈（い）え、活くる所の者萬もて計う。後ち去り、蜀に在りて黃散を賣る。故に世よ崔文子の赤丸・黃散を寶とす。實に神に近し^{*219}。

下巻**赤鬚子**

好んで松實、天門冬（てんもんとう・クサスギカズラ）、石脂（せきじ）を食らうと。齒落ちて更（あらた）めて生え、髪墮ちて再び出（い）づ、霞を服して絶後たり^{*220}。

東方朔

*214常服桂及葵、以龜脳和之、千丸十斤桂、累世見之。今荊州之南尚有桂丸焉。

*215賣藥於甯百餘年、人以爲壽矣。…仲死、民人取仲屍、棄水中、收其藥賣之。仲披葵而從、詣之取藥。

*216梁市上酒家人也。作酒常美…後百餘歲來…曰、「三年當大饑」。卒如其言。

*217善餌丹、賣於都市里間。積八九十年、乃知是故時任光也。皆說如數十歳面頬…三世不知所在。晉人常服其丹也。

*218略不食、時取黃精食之。…牀上化爲白羊。

*219後作黃散赤丸…賣藥都市、自言三百歳。後有疫氣、民死者萬計。長吏之文所請救。文擁朱幡、繫黃散以徇人門。飲散者即愈、所活者萬計。後去、在蜀賣黃散。故世寶崔文子赤丸黃散。實近於神焉。

*220好食松實、天門冬、石脂、齒落更生、髪墮再出、服霞絕後。

武帝の時…昭帝の時に至り…宣帝の初めに至り…薬を五湖に賣る^{*221}。

犢子

松子、茯苓（ぶくりょう）を探り、餌して之れを服し、且に數百年にならんとするに、時に壯（さか）ん時に老い、時に好く時に醜し、時人乃ち其の仙人なるを知るなり。…桃李を取り…皆な兜を連らねて甘美たり…冬に桃李を賣ると云う^{*222}。

主柱

道士と共に宕山（とうざん）に上り、言う、「此に丹砂有り、數萬斤を得可し…砂流出し、飛ぶこと火の如し、乃ち柱に取るを聽（ゆる）す…邑令章君の為に砂を餌するを明らかにすること三年、神砂飛雪を得たり。之れを服すること五年にして、能く飛行し、遂に柱と俱に去ると云う^{*223}。

園客

常に五色の香草を種（う）え、積むこと數十年、其の實を食らう^{*224}。

鹿皮公

芝草を食らい、神泉を飲み、且に七十年ならんとす。…後ち百餘年、下りて薬を市に賣る^{*225}。

昌容

常山の道人なり。自ら殷王の子と稱す。蓬蘽（キイチゴ）の根を食らい…之れを見る者（こと）二百餘年にして、顏色二十許りの人の如し。能く紫草を致し、賣りて染家に與え、錢を得て以て孤寡に遺る^{*226}。

谿父

仙人常に其の家に止どまる有り。從いて瓜を買い、之れに瓜子と桂・附子・芷實とを煉るを教う。共に藏して春分に之れを食らう。二十餘年、能く飛走し、山に升り水に入る。後ち百餘年…^{*227}。

山圖

山中の道人教えて地黃・當歸・羌活・獨活・苦參散を服さしむ。之れを服すること一歳にして、食を嗜（たしな）まず、病愈えて身輕し。道人を追いて之れを問う。自ら言う「五嶽の使なり、之名山に之きて薬を探る。能く吾に隨わば、汝をして不死たらしめん」と。

*221武帝時…至昭帝時…至宣帝初…賣藥五湖。

*222採松子、茯苓、餌而服之、且數百年、時壯時老、時好時醜、時人乃知其仙人也。…取桃李…皆連兜甘美…冬賣桃李云。

*223與道士共上宕山、言此有丹砂、可得數萬斤…砂流出、飛如火、乃聽柱取…爲邑令章君明餌砂三年、得神砂飛雪。服之五年、能飛行、遂與柱俱去云。

*224常種五色香草、積數十年、食其實。

*225食芝草、飲神泉、且七十年。…後百餘年、下賣藥於市。

*226常山道人也、自稱殷王子。食蓬蘽根…見之者二百餘年、而顏色如二十許人。能致紫草、賣與染家、得錢以遺孤寡。

*227有仙人常止其家。從買瓜、教之煉瓜子與桂・附子・芷實。共藏而春分食之。二十餘年、能飛走、升山入水。後百餘年…。

山圖之れを追隨すること六十餘年…*228。

毛女

道士谷春に遇い、松葉を食らわしめ、遂に饑寒せず、身軽きこと飛ぶが如く、百七十餘年*229。

文賓

教えて菊花・地膚・桑上寄生・松子を服し取りて以て氣を益さしむ。嫗も亦た更に壯なり、復た百餘年にして見（あらわ）ると云う*230。

商丘子胥

年七十、婦を娶らずして老いず。邑人多く之れを奇とし、從いて道を受け、其の要を問う。言う但だ朮（じゅつ・オケラ）・菖蒲の根を食らい、水を飲めば、饑えず老いざること此の如し。傳世之れを見ること、三百餘年*231。

赤斧

能く水湧を作り丹を煉り、硝石と與に之れを服すること、三十年、反りて童子の如し…後ち數十年…禹餘糧を取りて餌し、之れを蒼梧・湘江の間に賣る*232。

負局先生

輒ち主人に問う、「疾苦有る者無きを得んか」と。輒ち紫丸薬を出（いだ）し以て之れに與うるに、得る者愈えざる莫し。此の如きこと數十年、後ち大いに疫病あるに、家ごとに至り戸ごとに到りて藥を與え、活くる者萬もて計うるも、一錢をも取らず。吳人乃ち其の真人なるを知るなり。後ち吳山の絕崖の頭（ほとり）に止どまり、藥を懸けて下して人に與う。去らんと將欲（しようよく）せし時、下（しも）の人に語（つ）げて曰く、「吾れ蓬萊山に還らん、汝が曹（ともがら）の爲に神水を崖の頭より下さん」と。一旦、水有り、白色にして流れて石間從（よ）り來たる。下（しも）之れを服し、多く疾を愈やす*233。

朱璜

少くして毒瘕を病み、睢山（すいざん）の上の道士阮丘に就く。丘之れを憐みて言う、「卿、腹中の三尸を除かば、眞人の業、度教す可き有り」と。…丘璜に七物藥を與え、日に九丸を服すること百日、病、肝・脾臓の如き者數斗を下す。之れを養うこと數十日、肥健、心意日び更に開朗…且に八十年ならんとして、復た故處に見（あらわ）る、白髮盡く黒く鬢

*228山中道人教令服地黃、當歸、羌活・獨活・苦參散。服之一歲、而不嗜食、病愈身輕。

追道人問之、自言、「五嶽使、之名山採藥、能隨吾、使汝不死」。山圖追隨之六十餘年…。

*229遇道士谷春、教食松葉、遂不饑寒、身輕如飛、百七十餘年。

*230教令服菊花・地膚・桑上寄生・松子、取以益氣。嫗亦更壯、復百餘年見云。

*231年七十不娶婦而不老。邑人多奇之、從受道、問其要。言但食朮・菖蒲根、飲水、不饑不老如此。傳世見之、三百餘年。

*232能作水湧煉丹、與硝石服之、三十年反如童子…後數十年…取禹餘糧餌、賣之於蒼梧・湘江間。

*233輒問主人、得無有疾苦者、輒出紫丸薬以與之、得者莫不愈。如此數十年、後大疫病、家至戶到與藥、活者萬計、不取一錢。吳人乃知其眞人也。後止吳山絕崖頭、懸藥下與人。將欲去時、語下人曰、「吾還蓬萊山、爲汝曹下神水崖頭」。一旦有水、白色流從石間來、下服之、多愈疾。

更に長きこと三尺餘…此の如くにして武帝末に至るも、故（な）お在り^{*234}。

黃阮丘

道士なり…日に行くこと四百里、山上に葱・薤（おおにら）を種（う）うこと百餘年…時に下りて薬を賣る…^{*235}。

陵陽子明

子明に服食の法を教う。子明遂に黄山に上り、五石脂を采り、水を沸して之れを服す。三年、龍來たりて迎え去り、陵陽山上に止どまること百餘年^{*236}。

邗子

上に臺殿宮府有り…仙吏侍衛すること甚だ嚴なり。故婦の魚を洗うを主るを見る、邗子に符一函並びに薬を與う^{*237}。

玄俗

巴豆を餌し、薬を都市に賣る、七丸一錢、百病を治す。河間王、瘕を病み、薬を買ひ之れを服す、蛇十餘頭を下す。藥意を問うに…^{*238}。

六、『後漢書』方術伝の仙人の飲食

『後漢書』方術伝の費長房の話には、

費長房なる者は、汝南の人なり。曾（かつ）て市の掾と爲る。市中に老翁有り薬を賣る。一壺を肆頭に懸け、市罷（や）むるに及び、輒ち跳びて壺中に入る。市人之れを見る莫し。唯だ長房のみ樓上に之れを睹（み）、焉（これ）を異とす。因りて往きて再拜し酒脯を奉ず。翁、長房の其の神を意うを知るや、之れに謂いて曰わく、「子、明日更（あらた）めて來る可し」と。長房且日、復た翁に詣（いた）り、翁乃ち與俱（とも）に壺中に入る。唯だ玉堂嚴麗、旨酒甘肴、其の中に盈（み）ち衍（あふ）るるを見、共に飲むこと畢りて出づ。翁、人と之れを言うを聽（ゆる）さざるを約し、後ち乃ち樓上に就きて長房を候（ま）ちて曰わく、「我れ神仙の人、過（あやまち）を以て責めらる。今のこと、畢（ことごと）く當に去るべし、子寧（なん）ぞ能く相い隨わんや。樓下に少しく酒有り、卿と別れを為さん」と。長房、人をして之れを取らしむるに、勝（あ）ぐる能わず、又た十人をして之れを扛（あ）げしむるも、猶（な）お擧がらず。翁聞き、笑いて樓を下り、一指を以て之れを提（ささ）げて上る。器を視るに一升許（ほか）りの如くにして、二人して之れを飲むこと終日にして盡きず。

*234少病毒瘕、就睢山上道士阮丘。丘憐之言、「卿除腹中三尸、有真人之業可度教也」。…丘與璜七物藥、日服九丸百日、病下如肝・脾臟者數斗。養之數十日、肥健、心意日更開朗…且八十年、復見故處、白髮盡黑、鬢更長三尺餘…如此至武帝末、故在。

*235道士也…日行四百里、於山上種葱薤百餘年…時下賣藥…。

*236教子明服食之法。子明遂上黃山、采五石脂、沸水而服之。三年、龍來迎去、止陵陽山上百餘年。

*237上有臺殿宮府…仙吏侍衛甚嚴。見故婦主洗魚、與邗子符一函並藥。

*238餌巴豆、賣藥都市、七丸一錢、治百病。河間王病瘕、買藥服之、下蛇十餘頭。問藥意…。

長房遂に道を求めるとして欲し、而して家人を顧みて憂と為す。翁乃ち一青竹を斷ち、長房の身と齊しきを度（はか）り、之れを舍の後に懸けしむ。家人之れを見るに、即ち長房の形なり、縊死せしと以為（おも）い、大小驚き號（なげ）き、遂に殯（かりもがり）して之れを葬る。長房其の傍に立つも、之れを見る莫きなり。是（ここ）に於（おい）て遂に隨從して深山に入り、荆棘を踐み、群虎の中に、留まりて獨り處（お）らしむるも、長房恐れず。又た空室に臥し、朽ちし索（なわ）を以て萬斤の石を心（むね）の上に懸け、眾蛇競い來たりて索を噛み且（まさ）に斷たんとするも、長房亦た移らず。翁還り、之れを撫して曰わく、「子教う可きなり」と。復た糞を食らわしめんとするに、糞中に三蟲有り、臭穢特に甚し、長房意之れを惡（にく）む。翁曰わく、「子幾（ほとん）ど道を得んとするも、此に於（おい）て成らざるを恨む、如何ぞ^{*239}」と。

ここでは、「玉堂嚴麗」と、きらびやかで厳かな建物がみえる。これは『史記』二十八、封禪書第六の三神山が「黃金銀為宮闈（黄金、銀もて宮闈と為す）」とされていたこと、『列仙傳』卷下、邗子^{*240}の「上有臺殿宮府、青松樹森然、仙吏侍衛甚嚴（上に臺殿宮府有り、青松樹森然たり、仙吏侍衛すること甚だ嚴なり）」と似ている。そこで飲食のことば語られないが、「旨酒甘肴」というイメージはある。

これは、司馬遷『史記』卷五十五、留侯世家第二十五に、

「…願わくは、人間（じんかん）の事を棄て、赤松子に從いて遊ばんことを欲するのみ」と。乃ち辟穀を學び、道引し身を軽くす^{*241}。

とあるのとは、かなり異なっている。

留侯は漢の高祖の功臣の張良（?-168?）のこと、『赤松子^{*242}』は仙人とされ、後に

*239費長房者、汝南人也。曾爲市掾。市中有老翁賣藥、懸一壺於肆頭、及市罷、輒跳入壺中。市人莫之見、唯長房於樓上睹之、異焉、因往再拜奉酒脯。翁知長房之意其神也、謂之曰、子明日可更來。長房旦日復詣翁、翁乃與俱入壺中。唯見玉堂嚴麗、旨酒甘肴、盈衍其中、共飲畢而出。翁約不聽與人言之。後乃就樓上候長房曰、我神仙之人、以過見責、今事畢當去、子寧能相隨乎。樓下有少酒、與卿爲別。長房使人取之、不能勝、又令十人扛之、猶不舉。翁聞、笑而下樓、以一指提之而上。視器如一升許、而二人飲之終日不盡。長房遂欲求道、而顧家人爲憂。翁乃斷一青竹、度與長房身齊、使懸之舍後。家人見之、即長房形也、以爲縊死、大小驚號、遂殯葬之。長房立其傍、而莫之見也。於是遂隨從入深山、踐荆棘於群虎之中、留使獨處、長房不恐。又臥於空室、以朽索懸萬斤石於心上、眾蛇競來嚙索且斷、長房亦不移。翁還、撫之曰、子可教也。復使食糞、糞中有三蟲、臭穢特甚、長房意惡之。翁曰、子幾得道、恨於此不成、如何。

*240尾崎正治、平木康平、大形徹『抱朴子・列仙伝』（小川環樹・本田済監修、角川書店、1988年、『列仙伝』部分を平木康平と共同執筆）の邗子を参照。

*241願棄人間事、欲從赤松子遊耳。乃學辟穀、道引輕身。

*242拙稿「松喬考—赤松子と王子喬の伝説について—」、「大阪府立大学紀要」人文・社

『列仙伝』上巻の巻首に列せられる。張良は、辟穀や道引（導引）を行って仙人になることをめざした。辟穀は穀物を辟（さ）けて食べないことである。

『続仙伝』にみえる宋玄白は、括蒼仙都に遊び、

穀を辟け氣を服す。然れども酒を嗜み、或いは彘（ぶた）肉を食らうこと必ず五斤、蒜（にんにく）の虀（なます）一盆を以てし、手ずから肉を撮り、畢わらば即ち酒を飲むこと二升^{*243}

とみえる。

ここでは、辟穀服気を行いながら、飲酒、肉食、においのきつい野菜を食べている。

おわりに

「一、里耶秦簡の良薬芳草と昆侖五杏葉」では新出資料について考察した。始皇帝の時の仙薬に関する記述は『史記』などにみえるが、それらとは異なる記述である。始皇帝の仙薬探索が実際にどのように行われたかを知る手がかりとなる。また具体的な薬物名もあらわれ、興味ぶかい。この資料の出現によって仙薬に対するこれまでの考察は再検討しなければならなくなつた。里耶秦簡の該当部分が掲載された書籍は未刊行であるため、今後、さらなる考察が可能となるだろう。「二、『史記』の芝・奇藥・不死藥」は仙人や仙薬に関する文献的資料についての考察であるが、『山海經』との比較から不死薬は尸体の復活とも関わることを指摘した。これはいったん死ぬことにより復活して仙人となる尸解仙と重ね合わせることができる。また仙薬の「芝」について『列仙伝』『神農本草經』『抱朴子』などの記述を考察し、その展開をさぐった。「三、『論衡』の霞を食べる仙人」は、本来、行氣の術であった朝霞を服す話が、流霞一杯を飲めば、数ヶ月飢えない、といったものに変化していったことを記す。この話自体は作り話だと、くりかえし否定されているにもかかわらず、後世の仙人のイメージに一定の影響を与えていたと思われる。「四、『列仙伝』などの丹（水銀）の服用」では、仙薬として有名な丹や水銀について考察した。これも遺体が腐敗しないことと結びつく。「五、『列仙伝』と『神農本草經』」では、仙人の話である『列仙伝』と本草書のもっとも古いものである『神農本草經』とを比較し、薬の考察から、その共通点を指摘した。『神農本草經』は從来、東洋医学や薬学分野から研究されている。けれどもその本質は神仙思想にもとづいて薬物を分類し加筆した書物である。『列仙伝』の薬物についても東洋医学や薬学分野からも研究する余地があるだろう。また『列仙伝』の「常食」と『神農本草經』の「久服」が重なり合う概念であったことにも注意すべきであろう。「食」は食べることで「服」は薬の服用であるが、飲食と薬物は重なりあっているのである。「六、『後漢書』方術伝の仙人の飲食」は伝記とはいえ、小説に近い。そのなかで仙人は酒を飲み、ごちそうを食べている。

始皇帝のころに仙人説が登場したが、当初、仙人になるための方法は仙薬のみであった。そのころ個別の薬物に対する知識は相当あったと思われるが、その集成は『神農本草經』

会科学 40 卷、pp.43~60、1992 年を参照。

*243辟穀養氣、然嗜酒或食彘肉、必五斤、以蒜虀一盆、手撮肉、畢即飲酒二升。

をまたねばならない。『神農本草經』は、一度、飲めば昇仙できる不死の仙薬という考え方を軌道修正し、身体に害のない薬を久服しつづけるものこそが仙薬であると主張した書物である。そのためにこそ薬物を上・中・下に分類し、久服できる上薬が仙薬だとしたのである。

後世、たとえば、宋、唐慎微撰、『證類本草』などの本草書は、玉石・草・木・人・獸・禽・虫魚・果・米穀・菜などのように項目別に分類するようになった。この分類は百科事典に近く、仙薬を特別視しようという発想は希薄となっている。

※原文、書き下し文の文字は四庫全書電子版の体裁にならった。そのためすべての文字が正字体ではない。また書き下し文の仮名遣いは、金谷治『論語』（岩波文庫）の体裁にならった。そのため旧仮名遣いではない。